
魔法少女マルクトマルコ～『王国の魔法使い』と『白と黒の魔術師』～

明 綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女マルクトマルコ『王国の魔法使い』と『白と黒の魔術師』

【Nコード】

N8541I

【作者名】

明 綾乃

【あらすじ】

あきひみす マルコ
晶水 搏子は、賑やかな友達に恵まれたごく普通の小学三年生でした。

しかし…街に巣食う魔術師達と、悪の魔術師の野望を阻止しようとやって来た魔術師の転校生…彼らとの邂逅によって、マルコの日常は突然にも非日常の影を帯びて行く。

『意味』を奪われ怪物…ブランクと化していく人々、孤独に闘う転校生、

彼らを助けたいとマルコが願うその時、魔術の真髄である魔法の力がマルコの中に目覚める！

魔法と魔術の交錯する、オリジナル正統派魔法少女伝奇小説…
とくにご堪能あれ。

K e t h e r : 邂逅、魔術師と魔法使い（リトルボーイミーツガール）

.....胸が苦しい...誰か、これ、抜いて.....

痛みが強すぎて麻痺しだすという感覚を、たぶん生まれて初めて私は今経験している...

熱がスウッと引いて行くように力が入らない

きつと、胸から流れ出しているんだ.....この血と一緒に.....

ドシャリ、と...近くで何か大きな音が聞こえた

大人がものすごい勢いで地面にぶつけられたような音...

かすれた目を上に向ける

私を見下ろす、色のない光景

まるですぐ近くにあるような厚い白い雲、私を見下ろす...黒い黒い女のひと

よく見えないけど.....彼女はきつと...きつと.....すごく辛そうな表情をしていた。

「ようこそ林檎と腐臭の少女...魔と神が織りなすキセキとマホウの世界へ...」

携帯電話からサイレンのように響く怒声に私は無理やり意識を回復させられてしまった。

「美香あ、いきなり大声で叫ばないでよお電話なんだから」

『やー寝ぼけ眼でどうにか目覚まし時計は撃退したけど、どうしても携帯だけは答えなければならなくて寝ぼけ交じりに答えてみたってかんじがしたからねい』

う”、と正確すぎる美香の推察に押されてしまった。

私、あきひなみ晶水搏子は寝起きが弱いのだ。

多分二年前の事件以来、血圧が低いらしいからそのせいだろうか…あれ、それってデマだったっけ？

『とにかくっ！！あと10分で公園前に集合！！ハリーハリー、美香は拙速を尊ぶう』プツツ、ツー、ツー

「あちよつと美香あ？うう…眠いよお。」

イ

エエ

ミ

カ

「…まただ、疲れてるのかなあ？」

おまけに、最近寝起きに良く聞こえる…この頭に直接響くような…『声』のような何か。

近所の誰に聞いても聞こえないらしい…きつと気のせいなんだろうけど…

「この声、いつも怖いな」

まるで、声の主がいつも近くにいるようで…

紅葉も舞うある秋の日のうす寒い朝、青銅欄、東京都の端っこにある小さな町。

海に面し、既に各地で実用化されている近未来的な浄水施設の実験的都市でもある。

綺麗な海に綺麗な住宅街と、都内でも有数の自然を持つ町。

「マルコー、早く早く」

黄金のようにきれいで、それでシルクのように流れる金色の髪を持つ友人、金奈美香^{きんなみか}を追いかける。

「まってよ美香あ…はあ、へあ」

「だらしないぞー、そんなんじゃ朝の走り込み無理だねい」

にひひと笑いながら距離を開ける美香に、私はぷうとほほを膨らましながら問う。

「まあ、なんでこんなに急ぐ必要があるのぉ？」

「今日は転校生が来るんだから、実行委員の私たちが歓迎の準備をしないとねい」

美香から突然に与えられた大ニュースに、私はきょとんと目を丸くする。

「てんこうせえ…？美香いつの間にそんな情報を…」

「にひひー、この金奈美香の情報網を侮ることなかれよー」

腕を組んでドヤアと不敵な笑みを浮かべる美香。

確かに、彼女はとにかく面白いイベント、ハプニング、非日常をこよなく愛する少女なのだ。

それも、『自称、実行委員』を勝手に設立し自分からイベントを提案、計画を進めて行くほどに。

（自称というのは、実際そんな委員会があるわけでもなく、文字どおり自称であることからだ。）

私は、そんな眩しい太陽のような美香につきあって実行委員に参加しているんだけれど…

そう、転校生がやってくる…それは、私たち自称実行委員にとってとはとてつもない朗報だった。

「あら、おーい、朝も早くに元気ねえ二人ともねえ？」

通りかかった喫茶店の表にて、箒を持って二人を見かけた女性が声をかける。

「あ、メイさん！」

この女性、名は明^{めい}綾乃^{あやの}、近所の喫茶アヴァロンの店長さん。

どんな季節でも長袖のコートを脱ごうとしなかったり、私たちをたまに変な目で見たりちよっと怪しいけれど

べつに何するでもなく帰りにかき氷やココアを奢ってくれる優しいお姉さん。

そして、尊敬する私の命の恩人。

「転校生だよ転校生！今日うちのクラスに来るんだって、だから準備に行くのさあー!!」

「あらあら、あまりはしゃぎ過ぎて周りに迷惑かけちゃだめよー」

「へえ、はあ、待ってよお……」

明さんはあらあらうふふ♪とすこし興奮した感じで私を見て、労るようにこんどは私の頭をなでた。

「大丈夫？マルコちゃん……あんまり無茶しないようにねえ？」

明さんの表情は、息切れしていた私を見るようななんか怪しい視線ではなく、本当に心配するような眼だった。

私は昔から感覚が鋭いことだけは他の人より目立っていた、だからこそか身近な人の考えることがほんの少しわかってしまうのだ。

「……あの時の夢を見たんです、明さんと初めて出会った時の……」

明さんの表情が変わる、今度は痛々しい記憶を呼び覚まされたかの

ような…そんな表情。

おかしいな、あの時痛い目に会ったのは私なのに…明さんは、私の事を何よりも心配してくれる。

いいや、明さんはきつと何者であつても、あの場にいた人を助けてくれたに違いない。

明さんは怪しい人だ、でも…こんな所があるから、私はこの人が悪い人にはどうしても見えない。

そんな少しの尊敬を抱く人に少しでもつらい表情を浮かべさせてしまったことを、ほんの少しだけ後悔しつつ、私は口を開いた。

「だから、大丈夫です。あの時みたいに明さんに心配をかける私でいたくないから」

そんな私のおでこを、こつんと人差し指でデコピンされてしまう。

「あうっ」

「いつひっひ、言うようになったわねえマルコちゃん」

そんな様子じゃ、そろそろ傷が開く心配はいらなそうねえ…いつてらっしゃい、ね」

二カつとわらう明さんに、私はおでこをさすりながら手を振り美香の後を追った。

そう、これは誰かに守ってもらふ私から、誰かを守る私へと変わっていく物語…

そしてこれは、優しくて、強い、私の恩人が語る私の『はじまり』の物語…

> i 3 2 5 6 — 5 1 8 <

Magical Girl Malchut Malko
『王国の魔法使い』と『白と黒の魔術師』

……陰陽二種の力が一方が盛んであれば他方は衰え、止まることなく運動し、それによって世界の変化発展の過程が引き起こされるあの子がここまで回復すれば、後しばらくは私も頑張る必要は……そろそろなさそうねえ……あ

でもこの結界の歪み、これはどうにかしないとかしら……ねえ？

イ

イイ

ヲ

セ

エエ

……まあ、それより寒くなってきたし可愛い実行委員会の子たちにココアの準備ねえ♪

人数増えそうだし、買いだめしておかないと、ねえ♪

それから4時間後の九時、学校の教室にて力なく机に潰れ伏すマルコの姿があった。

「うう、眠いよう」

「くかー…」

美香に至っては既に隣の席で爆睡している。

しかし流石というべきか、準備は完了し教室の誰にも気付かれぬまま発動の機会を待っている。

キンコンカンコン

そんなこんなで搏子が眠気に堪えているうちに予鈴が鳴ってしまった。

「あ…美香、美香、朝の会始まっちゃうよ？」

「んあ…てんこーせー？」

マルコは美香の肩を揺すり起こす。

やがてやってきた先生がドアを開けたまま教卓に手を置き、発表した。

「あー、突然だが今日は転校生を紹介する。」

当然、一瞬にして教室内がざわつくが予想の範囲内と思っていた二人がいた。

二人は待っていたと言わんばかりに手元に設置した紐に手をかける。やがて教室の入口からカツカツと足音が聞こえたかと思うと、ラン姿の少年が姿を現した。

余談だが、彼女達の通う私立青銅欄小学校は私服登校だ、故に彼が転校生だとマルコは確信する。

そして転校生がキビキビと黒板に名前を書く様を見て他の女子達は彼についての評価を話し合っている。

目を覆い隠すような大きな眼鏡はともかくとして、その顔立ちはい印象を持たれているらしい。

少年は名前を書き終えて、生徒席に向き直り淡々と自己紹介を始める。

「かがとれん神賀戸 蓮です、これといって紹介するほどの事ありませんが、よろしく」

その自己紹介は、あまりにも単調でまるでかわる事を面倒くさいといわんばかりな印象を与えた。

ざわついていた教室も、その淡々とした物言いに驚いたのか、または呆れかえってか比較的にな静かになる。

「ふむー… ああいうタイプは引越し慣れしてるね、回りに関わるのを面倒くさがるタイプだ」

探偵が考察するように顎に手を当てつつ、マルコにしか聞こえないように美香は言う。

しかし美香が周りの状況に合わせて静かにするような人間ではないと知っているマルコは、焚きつけるように尋ねた。

「それでもやるんでしょう？」

「やらいでか！」

応えた美香は隠蔽用にゆるくして、転校生の自己紹介のうちに誰

にも気づかれないよう

手繰り寄せていた紐を勢いよく引つ張る、マルコもそれと同時に紐を引つ張った。

すると教室に異変が起こった。教室の四方の壁の内黒板を除いた三方に張つてあつたセロテープが剥がれ細く丸めてあつた垂れ幕が勢いよく下がった。

『おいでませ転校生』『ようこそ3年3組へ』

『ウェルカムトウ実行委員』

などなど書かれた垂れ幕が転校生に対し歓迎の意を示す。

しかしそれと同時に強制するような文章も含まれていた、寧ろ美香の目的はそこにあつたといえる。

クラスにおいて美香の言う『実行委員』はあくまで自称であり進級した春には委員の設立を申請していたのだが

委員の設立は多数決もしくは既定数以上、たとえば4人であれば許可される筈だった

しかし美香のパワフルさは既に同学年のほとんどに知れ渡っていて『面白ければいい』と『巻き込まれるのはごめんだ』等等賛成と反対に二分していた。

このクラスの人数は丁度40人、その上賛成派と反対派で完全に偶数で意見を二分していた上に

さらに他の人員もマルコとあと一人を除き既にどこかしらの委員に所属していたため

実行委員の設立は保留となっていたのだ。

しかし、チャンスは保留が決まった際反対派の誰かがつい言ってしまったことであつた。

『転校生でも来れば設立できたのになぁー』

『ふうん、じゃあ転校生が来れば意見に関わらず実行委員に入れてもいいんだね?』

『あつはつは、まさかそんな直ぐに来るわけないだろー?それだったら賛成してやるよ』

この機転を利かせたのはマルコだった、美香が感謝したのはマルコのその感覚の鋭さだった。そして現在、転校生は無表情だった目を驚愕に見開き啞然としている。

しかし周囲は嘗て賛成派と反対派に別れたにもかかわらずそれを歓迎するような雰囲気となっていた。

このクラスの皆は、文化祭をあと1ヶ月に控えた今でも大したアイデアが纏まらないほどグダグダと退屈していたのだ。

それを良しとしない考え方になったのも、実行委員設立に至らずとも

ひたすら教室のムードメーカーとそのパートナーであり続ける美香とマルコに影響されたことによるものだろう。

「ふっふっふ、これよ…このノリこそ青銅欄小学校3年3組というものよ!」

放課後、机を集めて実行委員設立後初めてとなる会議を開始しようと言いだした美香。

委員長の美香、副委員長のマルコ、転校生の蓮、そして…

「で、實際何をするんだよ?」

机に片肘をついて美香に問うツンツン頭の少年、葛葉^{くわのはたいち} 太一。

彼は青銅欄小学校において番長を名乗っている、実際番長制がこの学校に…まして小学校にあるのかは別として

それこそ美香が今まで非公式ながらも実行委員を自称していたのと同じようなものである。

そんな彼が何故実行委員に居るのかと言えば、斜め前に座る愛しい少女の為である。

「んん…まず、転校生の蓮君に校内を案内したほうがいいと思うんだけど」

「そつすね！」

普段に比べれば近距離のマルコの言葉に笑顔で勢いよく答える太一。

もうお解りだろう、太一はマルコにこの上ない好意を寄せているのだ。

しかし当のマルコは太一の事を『乱暴だけど本当は親切ないい人』くらいにしか思っていないのだが

「それならいいよ、もう昼休みのうちに学校内も全部把握したし地理も転校前に把握してるから…」

そう言つて蓮は席を立ち一人で何処かへ行こうとする。

「な、おい待てよ！てめえ、晶水がせっかく案内しようつて言つてんだぞ！」

「それはいいけど、まだ会議中だよ蓮くん？」

そう言って太一と美香は蓮を留める。

「…まったく……………!？」

イ

エ

セ

エエエエエエエエエエ

力

心底面倒臭そうに立ち止まりため息をついた蓮だが、直後にビク
リと体を震わせる。

その顔は眼鏡の上からでもわかるほど、焦りと嫌悪を同時に持ち合
わせたような表情をしていた。

「どうしたの？」

「…………どけっ！」

心配して割って入ったマルコを押しつけて、蓮は教室の外へと駆
け出そうとする。

「てめっ、マルコに何しやがる！」

そう言って太一が蓮の肩に掴みかかるが…

ヒュン

「へ…あだっ!？」

太一は天地が逆転したような錯覚を覚え、一瞬の後には蓮に組み
伏せられていた。

その光景には美香もマルコも驚かされた、それでも太一は番長を名

乗るのも領ける程には格闘技やケンカの技術を持っていたからだ。小学生レベルであることには変わりないが、それでも嘗ておとなしいマルコを苛めた6年生を
彼自身の腕力と家で習っている簡単な古武術ででねじ伏せた事がある程だ。

太一自身も目を白黒させて床に倒れている、その隙に蓮は全力疾走で廊下へと駆け出した。

「あ…神賀戸くん！」「こんの、待て神賀戸お！」

思わず駆け出したマルコと、怒りに燃えた太一は蓮を追いかけて教室を出る。

「むう、これは謎だ…よし、実行委員最初の活動は蓮くんの確保だあ！」

少し考えた後、美香も心底楽しそうに教室を後にした。

「はっ…はあ…はあ…ええと、何処行っただろう？」

マルコは蓮を追いかけて学校を出た後、太一と二手に分かれて彼を探すことにした。

しかし、太一や蓮と違い体力のないマルコは息を切らして商店街で足を止めた。

「あれ…ここ…商店街、だよね？」

マルコは見知ったはずの商店街の違和感に気付き、周囲を見回し

た。

肌で感じる空気が、まるで違うものだったからだ。

それだけではない、放課後の帰り道が一番一通りの多い時間の筈なのに、商店街に誰もいない時点で違和感があったのだ。

「…なんだろう…怖い」

肌寒いものを感じぶるつと身を縮こませ、マルコは一刻も早くこの場から去ろうとするが…振り返った瞬間に何かにぶつかった。

「キヤ、すいませ…ん」

その何かを見上げながらマルコは目を見開いていく
口は開いたままだそれを見直視することしかできなくなってしまう
た。

なぜなら、それは真っ白だったからだ。

なぜなら、それには輪郭すらなかったからだ。

なぜなら、それは白い机の上で写真をヒト型に切ったように…真
っ白で現実味が一切なかったからだ。

イイイイイイイイイイイイイイイイミイイイヲオオオオオオオオ
カアアエエエエエエセエエエエエエエエエ

それが自分の頭に向かって手を伸ばしている…しかし、マルコは
何もできないし行動する余地などなかった。

あまりに現実離れしたそれを前にして一切の思考をその理解に向
けていたからだ。

「…危ない!!」

何者かが、マルコと真っ白なそれを突き離れた…蓮だ。

「うあ！…神賀戸くん！？」

蓮はいつの間にか装着していた手袋を真っ白なその額らしき部分に押し当て、何かの呪文を唱える。

「魔術師レイライン エドワード ウェイトの名において、仮初の意味を『0』^{フランク}に与える！」

瞬間、鞭のような打撃音が響き蓮の手袋と真っ白なものの間から閃光が迸った。

すると、真っ白なそれが徐々に輪郭と色を帯びていき…商店街に住む一人の男性へと姿を変えた。

「お肉屋さんのおじさん…！」

慌ててゆすり起こそうとするが、蓮に押し留められる。

「やめておいてくれないか…この事を思い出したらまたフランクに戻ってしまうから。」

「神賀戸くん…これって一体…」

蓮は苦虫をかみつぶすような顔をして、白状するように述べる。

「他の人には秘密にしておいてほしい…僕はこの、意味を奪われたモノ達^クを助けるためだけに来た…魔術師だ」

「魔術師…あ………」

そう言って眼鏡を外した蓮の眼を見て、マルコは返そうとした質問の言葉を失った。

眼鏡をとった彼の瞳が、宝石のように蒼かったからだ。しかし、その間も長くは続かなかった。

もう一人、蓮の真後ろに切りぬきのような白いモノが現れる。

ブランクと呼ばれたその存在感があまりにも希薄だったため気付かなかったのだ。

ブランクはものすごい握力で蓮の肩をつかみ、片手で持ち上げる。

「がつ… あ、ぐ!？」

「神賀戸くんっ!」

右肩のみを万力のように掴みあげられ、蓮は苦悶の声を上げる。ブランクはもう片方の手を蓮の頭に向け、無音ともとれる雄たけびを上げる。

やがて蓮自身から英語のような文字が次々と剥がれ落ちブランクの手に吸収されていく、蓮自身の色もブランクのように希薄になっていく…。

「うわあああっ…!」

「神賀戸くんっ…!」

マルコは思い切ってブランクに体当たりをしてその体をよるめかせる。

ブオンと投げ離れた蓮は地面に転げ落ちて、辛うじて輪郭と色を残している状態で苦しげに唸る。

目標を投げ捨ててしまったブランクは、代わりと言わんばかりにゆ

つくりとマルコに手を伸ばす。

「っ！…や、いやぁ！」

胸ぐらをつかみあげられマルコは足をじたばたと暴れさせ抵抗するが、ブランクの腕力は万力のようにまるで抵抗にならない。

そして、蓮から奪った文字の浮かぶ手をゆつくりとマルコの頭に近付けて行く。

マルコは生理的な嫌悪感と、凍るような悪寒に顔を青く染める。

「やだっ…誰か、助けて…っ！！」

「祈れ、預言の権能に記された10番の虹色球たる王権によって、
奇跡は須く信じる心と循環する力によって顕現せり
故に片割れにして最後の剣サングルドフォン、ここに降りて汝に祈る
者を守護する事を誓いたまえ」

子供をあやすような、優しい女性の声とともに霧のような光がブランクとマルコを包んだ。

ザキユッ

と、肉を切るような音がしたかと思えば、マルコを掴み上げるブランクの腕が見る見るうちに私服を着た人間のそれに代わり

ブランクはその場でマルコを離し苦痛の悲鳴を上げながらその腕を押さえる。

「あうっ…けほっ、けほ…」

「早く！そこを離れるんだ！」

突然離されてむせるマルコをせかすように、声がマルコを導く。
マルコは言われるがままにその場から距離を置く。

「誰…？助けてくれたの…？」

「早く、その魔術師も助けたいんでしょ？だったら自分の力で助けないと！」

霧のような光の中から、小さい鳥のようなものが姿を現した。
それは、純白のトカゲのような…ミニチュアの恐竜のような軀に鳥のような羽を持つ不思議な生き物だった。

「…ドラ…ゴン？」

「ちがう、私は天使だよ！ほら、この腕輪をつけて！」

天使と名乗るその幻獣は、足に引っ掛けておいた腕輪をマルコに渡す。

「これは…？」

「それは物質界を操る『王国』の力、10番のセフィラの象徴の『円環のドラウプニル』。君はこれを持つべき魔法使いに選ばれたんだ」

円環のドラウプニルと呼ばれたそれは、黄金の輝きを放ちながら装備者を待つようにカチャリと開いた。

不思議な事に、ドラウプニルの表面に書いてあるものが紋章と文字である事と…その意味が触れた途端に理解できた。

「そして唱えるんだ、ブランクを生み出した魔術を超える…本物の魔法きせきの言葉を！」

全く状況の呑みこめない状況の中で、マルコは蓮の姿を見る。

苦悶の表情で地面に倒れ伏し、それ以前でも孤独であり続けたであろう少年は今、希薄になった存在をこの世界に押しとどめようと腕を握りしめている。

そして肉屋のおじさん…何故あの怪物になっていたのかはわからない、だけど彼が怪物になる必要はなかったはずだと理解する事は出来た。

その為に蓮は孤独であろうとし、威嚇として太一にあんな事をしたのだ…

それを理解したとき、マルコはブランクに向き直り不完全に人間に戻り苦しむ姿を憐れに、決心する。

「…助けたい…この人たちを助ける奇跡まほうの力が欲しい！」

ガチン！と、マルコは右腕にドラウプニルをはめる、そしてその表面に記された文字を読み上げる。

「王の財宝よ、流れる円環の渦よ、再顕現せし『王国』マルクトの魔法を示せ。私は『王国』の魔法使い！
フェオ・ユル・ウル・アンスール！！」

その呪文に反応し、円環のドラウプニルが光り輝きマルコの姿を包む。

幻を映し出すようにドラウプニルからまったく同型の黄金の腕輪が

生まれ、輪ゴムのように伸びて黄金の円環となってマルコの周囲を廻る。

マルコは荒れ狂う魔力の奔流に流されるように瞳を閉じて身を任せる。

そしてマルコの身に着けていた服が総て消え、新たにオリーブ色の服と革の鎧のような装甲に身を包まれる。

そして髪の色は小豆色からレモン色へ、そして玉座に座る若い女性のような人形が入った水晶の首飾りが首にかかりその表面に『10』という数字が光る。

やがてドラウプニルの光も、天使の発した霧の光も消え、『王国の魔法使い』へと変身したマルコがその姿を現した。

> i 3 1 6 1 — 5 1 8 <

「…わあ。」

変身を終え、目を開けたマルコは感心したように自分の姿を見る。髪のひとつ房を摘み、それがレモン色になっていることも確認する。

「…髪染めちゃった……きゃ！」

明らかにずれた事を気にしていたマルコだが、痛みを訴えるように突進してきたブランクをとっさに避ける。

身体能力も上がっている事もわかった…しかし…

「ど、どうやって助ければいいんだろう？」

「ああもう、流れるものをイメージするの！」

ブランクは魔力の源である『意味^{リイン}』を奪われたモノ、だからその魔力を自然と循環させれば元に戻す事が出来る！」

天使がすかさずフォローを入れる。

「あ、ありがとう…ドラウプニル…巡って…！」

マルコがブランクに右手を掲げて念じると

ドラウプニルから再び腕輪を拡大したようなリングが生まれブランクの周囲を飛び回る。

そしてガチン！という音とともにブランクを中心として固定すると、黄金の光でブランクを包んだ。

「が…あああああああああ…！」

ブランクが苦悶の声を上げるのを合図とするように、天使の体に変化して黄金の剣と化す。

「これで最後、魔術師の術から切り離す！その為の片割れにして最後の剣サンダルフォンよ！」

言われるままに剣の塚を握り、マルコはブランクに向かって走り出す。

「ごめんね、今解放してあげるから！」

そう言ってマルコは、輪郭を得かけているブランクに黄金の剣を振りかぶり

勢いよく切り払った！！

「やあああっ…！」

「ぐ、がああああああ…！」

断末魔のような悲鳴を上げ、ブランクの体から無数のルーン文字が爆散する。

飛び散った文字たちは、吸いこまれるようにお肉屋さんのおじさんと蓮の体に吸い込まれていく…

そしておじさんは顔の色に生気が、蓮は輪郭と色がはつきりとしたものになっていく。

「終わった…修正、完了。」

マルコがそう唱えると、瞬時に服装が元に戻り、ドラウプニルは細くなつて金色のブレスレットになる。

「はぁ…はぁ…はう…」

緊張の糸が切れたのか、元の小豆色の髪に戻ったマルコはそのまま後ろ向きに倒れようとする。

「おっ…と、ねっ」

それを受け止めたのは箒を持った女性、明だった。

「また派手にデビューしたもののねえ、さつて…この子たちが起きたらまずは何から説明するべきか、ね」

そう言う明はマルコと蓮を両肩に担ぎ運んで行く。

明は愛おしそうにマルコ御寝顔を見て、祝福の言葉を贈る。

「ようこそリンゴと腐臭の少女…魔と神が織りなすキセキとマホウの世界へ…」

こうしてマルコは、突然にも非日常の世界へと足を踏み入れてしまつ。

その先にあるのは魔法の業カルマが、奇跡の業ワザが…

それを知る者は、今のところ誰もいない

私さえも・・・

K e t h e r : 邂逅、魔術師と魔法使い（リトルボーイミーツガール）（後書き

魔法少女小説、始めました。

彩化しの蜘蛛系商会とは世界観、舞台設定を地味に共有しつつ話を進めて行きたいと思ってます。

もちろんその元になったパラレルワールドともなのですが

こっちはほぼ完全に関わりないパラレルワールドなのでファンフィクションからは除外しております。

いつかセクメトたんみたいな別の魔法少女モノとクロスオーバーしてみたい

とりあえずそこら辺を目指してゆっくり書いていくつもりです、ハイ。

これからどうぞよろしく…ね♪

Cochma：魔女、魔法と魔術

魔術：それは神々の奇跡を模倣した技術

神々へと至る魔法使いの偽物にして己の知識に何処までも貪欲なものたち

それは時に人間としての箍を外し、災厄を引き起こす

魔術師は何よりも因果の存在を忌避するはずなのに

因果というものは何処までも魔術師を追いかける

その因果そのものが僕だというのなら

いいだろう、何処までも追いかけてやる…

「ん…あれ、私…！？」

目を覚ましたマルコは、己の置かれている状況に混乱した。

気が付いたら何故か病院で着るような手術着を着せられ

ベルトで手足を固定されたうえで手術台の上に乗せられているのである。

部屋の全貌は暗くてよく分からず、傍らにはなぜか手術用の手袋とマスクをつけた

見知った喫茶店のおねーさん、明が佇んでいた。

「あ…あの、メイさん…？」

「ふっふっふ、今から貴女は変身ヒロインとなるのよお、ね」

そう言って黒い笑みを浮かべる明の手には、何故か工事現場に使うような桐貫ドリルが握られている。

明がグリップを握るとドリルはギュリィィィと歯医者そのれより

も重く嫌な音を立てて高速回転する。

あおむけの状態にその音に嫌な連想を掻き立てられたのか、マルコの顔はどんどん青くなってしまう。首を横に振る。

「あ…あの、何が何だか…ひゃ！」

「じつはおねーさんはねえ、シヨ。〇の幹部なのよー、イカ女なのよー、ね？」

明は手術用に使われた服の穴からマルコのおなかにひたひたとドリルの先を当てる。

当然先は鉄なので冷たい、それに充てる者がドリルである為危機感が触覚を上げているのである。

「やつ…やめ…やめてえっ…メイさぁん…」

泪目で懇願するマルコに対し、ゾクゾクと愉悦に満ちた表情で明はマルコを見る。

「ふふふ、それじゃあ改造手術しましょうかしらねえ、痛かったら手を挙げて下さいねえ」

「麻酔なし！？…あー！ー！ー！…！！！」

悲鳴がどこまでも暗い手術室にこだました。

「ふあ！！！」

冷や汗を大いに流しながら、マルコは鬼気迫る表情でカウンターから起き上がった。

「目が覚めたかしらあ、ね？」

目の前にはグラスを拭く明の姿が…思わずマルコは音を立てて引きさがる。

よくよく周囲を観察すると、そこは明の営む喫茶アヴァロンだった。

「あらあらあどうしたのかしら、ねえ？」

「夢の中で悪戯でもしすぎたんじゃないの？」

明が困ったようにカウンターの端を見ると、鳥のようなトカゲのような幻想生物が返事をした。

「あらあ、いくら私でも夢の中に干渉なんてでないわよあ、ねえ」

「ダウト、あんたほどフリーダムな魔法使い見たことねえよ」

「あ…天使、さん？」

その幻想生物を見たその時、マルコはようやく自分の状況を思い出した。

自分は魔術師を名乗る転校生と、ブランクという怪物になってしまった人を助けるために…

まるでアニメに出てくるような魔法使いになって…そして、ブランクを倒した瞬間に安心して気絶してしまったのだ。

「神賀戸くん！！神賀戸くんは！？」

「安心して、彼はいきなり魔力や意味^{ルン}を出し入れされて体が吃驚^{ルン}してる状態なのよね

だから今は店の奥で休ませているわ、安心して…ね」

優しくそう言うと、明はマルコの頭を優しく撫でた。

「んゆ…明さん、一体…この街に何が起きているんですか？

…神賀戸くんは…明さんは何でそんな事を…」

焦って聞こうとするマルコの唇に、明は人差し指を充てて制止する。

「落ち着いて聞いて…今説明するから、ね」

「早い話、貴方は魔法少女になったのよ…いや、私が貴女を魔法少女にしたのね。」

それを聞いたとき、一瞬さっきの手術台の夢を思い出し顔を青くするマルコ。

しかし、あれはあくまで夢だと思いを切り替え

それがブランクから助けくれた天使を呼び出した、あの優しい呪文だと確信する

あれは明の声だったのだ。

「魔法少女…いえ、私たちの業界では『魔法使い』というのは結構珍しい体質のようなものでね

かくいう私も貴女とは別種の魔法使いなのよ、だから貴女に魔法の力を与える事ができたわけね。」

そう言うと、明は手のひらを掲げて紫色の焰を出して見せる。

「わあ・・・」

その神秘的な光にマルコは一瞬心を惹かれるが、その焰を握りつづいて明は続ける。

「といつても私はその中でも悪い魔法使いだけだね・・・」

これは貴女に魔法を渡す前の話、魔法の力を使って『王国』の魔法を手に入れた私だけど

ここで問題が出てきたのよ・・・何処かで私とは別の悪い『魔術師』が暴れてるみたいなのよねえ」

魔術師：蓮も名乗っていた魔法のような不思議な力を使う者・・・

ブランクを作ったのも魔術師だって蓮や天使が言っていた事をマルコは思い出す。

「『魔術』っていうのは、魔法使いの使う『魔法』を一般の人でも使えるようにしたものね

ただし、自然や神の力を借りる魔法とは違って魔術は大きな代償を伴うし、面倒くさい準備を要するけどね

たとえば意味、これは魔力リョク：自然があらゆるものに持たせた運命のようなものね

そのものが持つあらゆる役割や運の良さや悪さ、あとはそれがどういった重さで未来でどういう状態になるのか決めるの・・・

そう言ったものを持っているものは無意識に魔力を放出して己の役割を果たそうとするのね

でも、魔力を目的にそれを奪おうとする魔術師もいる・・・

それが恐らくは悪い魔術師がブランクみたいな意味を奪われたものを利用して意味を集める目的ね」

明はできる限りかいつまんで説明したが詳しい事はマルコにはよく理解できなかった。

しかし、魔術師である事がとんでもないリスクを負う存在であり同時に私利私欲の為に他人から大事なものを奪う人が居る…それだけは理解できた。

「で、そいつに対抗しようにも理由も手掛かりもないし私の魔法はブランクには相性が悪くてほとんど無意味

しかも『魔法』は一人につき一種類って制約があるから『王国』が妨害して元から持っていた魔法もろくに使えないし

邪魔だなーどうしたものかなーと思っていたら、丁度よく貴女達が襲われていたから

私はとつさに『王国』の魔法を貴女に譲ったわけなのよねえ」

「じゃまだなーって…あはは…」

魔法使いである事を明かしながらも、どこかいい加減ないつも通りの明にマルコはどこか安心していった。

しかしそこで、口を挟む少年の声。

「魔術は魔法の模倣であるがゆえに魔法使いも極めれば魔術を使える…そうして自分の弱点を補う魔法使いも居る…

お前が一番怪しいんだ…『^{クリフォト}反の魔法使い』…！」

店の奥からよろよろと蓮が現れ、明を睨みつつ言う。

眼鏡を外した連のその視線は、青い宝石のような瞳からは信じられないような憎悪と侮蔑の念が込められていた。

その殺気にマルコは怖気づきながらも、蓮に反論しようと口を開く。

「そ、そんなことないよ、メイさんはちょっと怪しいいい加減な

ところもあるけど
ずっと前からこの町にいる優しいお姉さんだよ？」

「そんなことは充てにならない、それも魔術の準備期間かもしれないし

そもそも明といったか？その女の魔法の性質は、通常ならまず得ることはできない

魔法でも魔術でもタブーとされている反の魔法クリフォート…」

蓮が言い切ろうとしたが、明に指先でマルコと同じように制止される。

「言っただしょう、魔法は先天的であれ後天的であれ魔術と違って体質のようなものだって

…それともきみは善悪二元論のゾロアスター学派だったかしら？」

「リマンユ…ならおまえがこの件にかかわっていない証拠は何だ、絶対悪アンの魔法使い」

蓮が明のことをそう呼んだときに、マルコは気づいた。

明の口調が、いつもと違うアクセントの…彼女が落ち込んだ際に使う口調だということに。

「物理的な証拠はない、でも私はあなたたちの目指す『神』の域にこれっぽちも興味がない

それじゃあ不十分かしら？」

明がそういうと、魔術師は考えるように制止し…音をあげるように謝罪する。

「悪かった、事情の確証を得る前に確定するのもタブーだった…それに失礼だった」

それを聞いた明はわざとらしく安心するように胸をなでおろしたため息をつく。

「よかったわあ、悪の魔女が悪いことをする前に犯人扱いされたら面目も何もあつたものじゃないし、ねえ」

元に戻った明の様子を見てマルコも安心する、こういった事情かは相変わらずわからないが

明にとって反の魔法使いであることを非難されるのはきつと体質を非難されることに近いものなだろう。

そして、明はそういうと唐突に蓮に抱きつき撫で回す。

「ぶあ！？…な！！」

「それにこんなかわいい子に殺気なんて向けられたらおねーさん悲しいわあ」

「や…やめろっ！！こら…！！」

目を白黒させて明に撫で回され、蓮は顔を真っ赤にして混乱したマルコや美香にいろいろおごってくれる理由も冗談だろうか、そう言っていたのだが

可愛い正義、それが明の信条らしい。

「あー…メイさん、ここに学ランの男の子こな…居た…ふうん、これはいつたという状況なのかなあ？」

ドアを開けてアヴァロンに入ってきた美香は、その状況を見て一瞬呆然とするが

すぐ面白そうな顔をしてマルコに状況を聞きだそうとする。

「あ……えと、その…」

どう言おうかマルコがおろおろしていると、マルコの前に魔方陣と光る文字が現れる。

これは自動筆記、ご都合主義的に魔法魔術関係者にしか見えないから安心してね

とりあえず魔法云々については隠しておいてね、ばれたら魔法で動物に変えちゃうわよん

あなたの魔法については、また後で話すことにしましょうね B y 明

つい返事をしそうになるが、ばれたら動物に変えるという文を見て口をつむぐ。

「んー、どしたの？」

美香がいつもと違うマルコの様子に興味を持ち始める。

何故状況を隠す理由があるか聞かれる前に言っておくわね

お 約 束 だ か ら 、 ね ♪ B y 明

そんな明の文章とよくわからない行動理念に脱力しながらも、明の書いた状況設定に合わせながら

マルコは何とか美香に納得いくような説明を開始した。

Cochma：魔女、魔法と魔術（後書き）

【反】（魔法）

クリフォート、十字教におけるの生命の樹の対極たる悪徳の樹を司る魔法。

総ての悪徳と、法則の否定を表し存在そのものを反転する禁忌の魔法。

数字は虚数（ $i1-i\infty$ ）を表し、善悪二元論の魔術宗派からは絶対悪とも呼ばれる。^{リマンユ}

【魔法使い】（魔法）

神、もしくは天使の与える権限によって世界の法則を操り超常の現象を引き起こす事の出来る存在、もしくはそうなる事を運命づけられた人間。

【O H 社】（魔術）

黄金の夜明け社と呼ばれ、十字教新派の大騎士団長が社長として立ち上げた組織。

本来十字教は魔術の存在を否定、もしくは隠そうと騎士団を動かすものののだが

もしこの会社の存在を弾圧しようものなら騎士団長自らが騎士団を解散すると組織を脅しているため両組織とも成り立っている。

通常、日常世界において秘匿されるべき魔術を就職資格として扱い魔術師のサポートを行っている。

B i n a h : 問答、美学と事情

「蓮くんが明さんの従兄弟だったなんてー、じゃあ今朝に教えてくれたってよかつたんじゃないの？」

ココアを一口煽ってから、美香が文句を垂れる。

「あらー、だって折角の謎の転校生じゃないのお、黙ってた方が面白いでしょう、ね？」

「な…謎のって…くっ」

お茶目に頬に指をあてて首をかしげる明の出したあまりにもあんな理由に蓮は呆れたような顔で抗議しようとするが明に一睨みで黙らされる。当然、蓮が明の親戚である筈がない。総て明のついた嘘だ、それも詳細も知らない非日常の存在を名乗る少年をこのような形でフォローするのはひとえに

『可愛いものは正義』という明の持論のみで判断された事であつて、それに対して救われた蓮は何も言う事は出来なかった。

しかし、ここで対応に遅れたがゆえにどうしようもなくなった哀れなマスコットが居た事も忘れてはならない。

「……………っ！！……………っっ！！！」

美香の手元でひたすらふにふにされている白い竜やら鳥やらのような不思議生物は、ただ必死にぬいぐるみのふりをして耐えている。美香は特に、不思議な材質でできた仮称天使の鱗の感触が気に入ったのだろう

鱗を一枚いじり揉まれるたびにその影の薄さから先ほど自己紹介す

る事さえままならなかった哀れな大天使長補佐は
悲鳴を上げそうになり鋼の精神でそれを押さえていた。

「このシルクのような真珠のような肌触り、今日一番乗りで喫茶店
に入ったマルコへのプレゼントにしたって

明さんはやっぱり太っ腹だよねいゝ早く私の分もできないかなあ
…」

「……………つ！！！！ぐへあ……」

美香は手作りぬいぐるみと言われた天使を力いっぱい抱きしめる。
いくら天使とは言えそのサイズは小動物、肺の中の空気が一気に押
し出され天使はぐええと言いつつになるが
それ以前に肺の中に空気がないため辛うじて発音せずに済んだ。

「み…美香、そろそろそのぬいぐるみ…」

マルコが美香におずおずと尋ねる。

（た…助かった、特例で人間に選ばれた魔法使いとはいえさすが私
に祈ったにんげ…）

「その、まだ私もあんまりもふってないの…。」

「あいよゝゝ」

マルコの頬を赤らめたその上目づかいは状況を知らない人、或いは
それに慣れていない人であれば
思わず理由も何も問わず財布の中の諭吉さんを問答無用で渡してし
まうほどの威力を誇るだろう。

しかし、天使にとってはそれが自分を拘束し拷問する二人目の悪魔の挙動にしか見えなかった。

死にかけて天使の体がカウンターの上に置かれた頃、美香は門限の時刻に差し掛かった為

マルコも今日は天使を鞆に入れてそのまま帰る事にした。

明の従兄弟と言う事になってしまった蓮はそのまま明の喫茶店に残る事になってしまったが

そもそも美香の家は門限や規則には厳しいため今日の早起きや早登校は許されたのだろうかとマルコは思う。

しかしそんな疑問は些細なことだ。

美香と一緒に帰路を辿る道中、力尽きて地面に寝る太一の姿があったが美香の提案であえて放置。

それも些細なことだ。

マルコはただ今日…それもついさっき遭遇してしまった非日常の事件の事が再び頭を埋め始めていた。

目が覚めたばかり、明の話を聞いているときは正直夢うつつな感じで魔法使いとして二人のブランクを助けた事は頭のどこかでリアルな夢だと思っていた。

マルコはこの日、自分が寝起きが悪いという事を自覚した。

いや、それにしても明も美香も喫茶店を含めた町の様子も何もかもが変わらな過ぎて…

（まるで初めからそれが当たり前だったかの様になってて…明さんは一体どうして…）

「…ルコ？マルコー？」

「はう！…な、なに？」

美香が心配そうに話しかけている事に気付き、マルコはつとして美香に返事をする。

「しっかりしないと駄目だよマルコ、今日から私達晴れて『公式』実行委員会なんだから」

美香がそう言っ、て、ばしばし肩をたたく。

美香は何時だつてそうだ、いつだつて自分の美学に正直な女の子なのだ。

鬼ごっこをしたいと思つたら、正直にグラウンド中から声をかけて周り大規模に鬼と人間の戦争を始め
重い荷物を持ったおばあちゃんを見て助けたいと思つたら、総ての荷物を一身に背負つて家まで送る。

やりたいことを一番やりたい形で実現する事こそ美香の美学なのだ。そんな美香の姿と、ブランクを助けたいと思つた時の自分の姿は何処にかぶつていたような気がした。

（ああ、たまには私も我儘が言えたんだなあ…）

美香を見て、いつもパートナー役やサポート役に廻ることの多いマルコはそう思った。

『魔法の力については後で話しましょうね。』

私も、とっさにあなたに渡しちゃったから後悔はしているのよ…

魔法も魔術も、本来マルコちゃんの世界には必要のないモノだから必要ないと思つたら明日の朝にでも私に返しに来て…ね？

明がマルコに読ませた自動筆記の最後はそんな文章で締めくくられていた。

「美香…私人助けしちゃったんだ、今日」

「うん？」

マルコの言葉に美香は耳を傾ける。

「助けたいって思ったから、我儘でもそう思っ
てむりやり助けちゃったんだ。」

「…ふむう、それで？」

美香は何処か成長した感じを見せた幼馴染に、いたずらつ子な笑みを浮かべて問いかける。

マルコもマルコで、その笑みにいい笑顔で答えた。

「なんだか、我儘を押し付けたみたいで…すっきりした」

「癖になるだろう」

美香の…回答ともとれる問いに、マルコは笑顔でうなずいた。

なんだか押し付けになってしまいかもしれない、或いは自分勝手だでも、それでいいと正直に思えたのは自分がそんな正直で、そういつた我儘が上手な友達に恵まれているからだと思う。

あのブランク…意味を奪われた人々は、そしてその原因たる魔術師はまだこの街に居るのだろう。

ならばマルコは明に再び我が儘をする、それだけの決意と理由をマルコは持っていた。

「で、『この町』に來た魔術師ということは君も何か知っているんでしょう、ね？」

私以外からこの町の魔術的意義が知り合い以外にばれることはただ一人の弟子を除いて有り得ない

それに私はあの弟子に關しては少なくとも私の師匠以上に信じているつもりだから通常それは有り得ない しね？

だとするとO H 社か十字新派の騎士団から來たつてところかしらね？」

「後者だ、流石は反の魔法使い

自分の周囲を守るためのコネクションは確立されているってことか」

思考する余裕ができたとはいえ、蓮の顔はいまだ赤かった。

何故なら未だ蓮はぬいぐるみよろしく明に抱きつかれたまま設問されているからだ。

明は普段コートで着やせ着膨れはしているがそれでも解るほどの造形的に見事なスタイルを持っている。

少なくとも後ろから抱き疲れている蓮の後頭部には枕のような二つの塊が押し付けられているのだから

たとえ魔術師を名乗るものであつても人間の男としては意識せずにはいられないのは必然である、絶対に。

「かーわいいねえ」

「うぐううう……」

明は構わず……というよりむしろその様子を楽しんでいるようだ。

「言っておくが、外見がどうであれ僕はこれでも37歳……少なくとも君より年上だぞ？」

「知ってる、ちなみに私は二十歳よん…ね」

この屈辱的な状況を打破するため、半分はのぼせ上がった脳で導き出した最後の手段…というより秘密だったのだがあまりにもあつさりと即答されてしまった。

「魔術の対価に年齢を差し出す魔術師がいるっていうのは聞いたことがあるけど、その類？」

…何かそれって小説や漫画で出てくるような若返り目的で魔法に手を出すやからが喜びそうな白ものよねえ」

ぐうと観念したように…しかし魔法使いに対して魔術のプロとしての性質が、正確なところを述べる

「…正確には魔力の絶対量を得るために肉体年齢のみを魔力に変換しているんだけど

したがってテロメアや寿命の絶対量も増えることはない、それこそ魔法の域だ…ぬああ!？」

「ムキになっちゃってかゝわいいゝねえ」

明の抱きつき攻撃に、問答無用の撫で回し攻撃が追加される。

しかし撫で回し攻撃は中断され、明は蓮の顎を持ち顔を寄せる。

それこそ、人間を誘惑する魔女のように…

「さて、新しい魔術理論についての情報を得るのもいいのだけれどそろそろこの町に何がいるのか…何が行われようとしているのか言いなさい？」

早くしないと、『アレクスター獣666』の間接権限で騎士団を脱退させた上で

本当に私の従兄弟として日本に戸籍を置かせるわよ？」

「団長…カイン・A・C…先代の反の魔法使いの直弟か…。」

その名前を聞いたとき、明の目が糸から鋭い針のように薄く開かれる。

「お互い隠し事には向かない性分じゃない、ここは情報を共有した上で互いについて語りましょう？」

その為にあの偽善者は貴方をよこした、違つかしら、ね？」

B i n a h : 問答、美学と事情（後書き）

【青銅欄式鬼ごっこ】（儀式？）

美香考案の究極的鬼ごっこ。

美香がこれをやりたいなーと思いついた程度に人数が集まりこの儀式が発動した瞬間

グラウンドに居る全員が強制的にこのゲームに参加させられてしまう。

参加者は鬼と人間の量派閥に分けられ鬼長と人間長が一人づつ選ばれる。

鬼にタッチされた人間は負けというルールではなく

鬼は人間を、人間は鬼を捕え本拠地へと連れ去り鬼長、人間長にタッチさせる。

そしてどちらかの長にタッチされた者は敵の手に落ちて鬼もしくは人間になってしまう

鬼長人間長のタッチ効力はアジトと決めた数メートル範囲しかなく終了時にどちらの数が多いか、もしくはどちらかの長が敵の手に落ちたかによって

片方の種族の実が生き残るという大規模サバイバルゲーム。

C h e s e d : 遭遇、少女と少女

気が付けば、あたりは血の海だった……

私は倒れていて動けなくって、目の前には刃物を持った男の人が立っていて

それが自分の血だと気付いたのは、胸の痛さと息ができない事実からだった

幼かった私に耐えきれぬ筈は無くって、そのまま意識を手放しそうになつたけど

誰かが、男の人を背負い投げ飛ばして、私を担いで全力で走りだした

「大丈夫？逢う魔が刻に通り魔に合うなんて、不運な子、ねえ？」

「こんなに可愛いのに気がしないわ、ね？」

…笑ってそう言いながらも彼女は全力で私を病院に運んでくれた
それが二年前…私、晶水搏子と明綾乃の偶然にして初めての出会い
だった

עגלע עגלע עגלע

「んゆ…もう朝あ…？」

目覚まし時計が差した時間は午前5時半、些かましになったとはいえマルコ達小学生にとっては早すぎる時間だ。

そんな時間にマルコが起きることにしたのは、昨日の夜の事が原因となる。

「魔法使い…続けようと思うんだ」

「…偉い！それでこそ私に祈った者だわ！」

パジャマ姿でベッドの上でお互い正座―天使は普通に降りてるだけだが―しながら、お互いの第一声はそれだった。

「…でも、何で？」「え…？」

天使の問いにマルコは首をかしげる。

「…他でもない魔法使いを選定する私たちが言うのも難んだけど、魔法使いを続けるってことは

あのブランクやそれを作った魔術師と戦うことを意味するのよ？

さっき自分で言ってたけれど、あのメイって魔女がわざわざ自分だけで不利な相手と戦う事なんてしないだろうから

それに…何より魔法使いになったといっても貴女は特例でメイに選ばれただけの一般人じゃない…」

「天使さんは明さんとお友達なの？」

マルコの問いに天使は両羽を持ち上げてやれやれと言ったポーズをとるが、否定も肯定もしない。

「私はメイに無理矢理召喚されたのよ。チート技で無理矢理呼び出しておいて邪魔とかいうもんだから意地でも離れなかったの私を連れてるってことは『王国』の魔法使い権限も有してるってことだからね

…で、どうなのよ？」

「…よく、解らないよ…だけど、見ちゃったから。
あの白い化け物と戦ってる神賀戸くんも、化物にされて苦しんでる人も
だから助けなきゃ、どうしようもなくすっきりしないんだと思うんだよ」

そう言うマルコはパジャマの胸元を少しあける。

相手が子供で同性？とはいえ、いきなりのマルコの行動に天使は顔を赤くしてそっぽを向きかけるが

マルコの胸の真ん中にある傷跡を見てそれをやめた。

それは深く、大きな傷跡で…まるで絹の上に大きなかさぶたが張られているような傷跡

大きくはないはずなのに、その深さと生々しさが小さいマルコに付いている事でより大きな傷跡に見えた。

「それは…？」

「私ね…死んじやいそうになった事があるの」

二年前奈良に家族で旅行に行ったときに、私だけはぐれて

そのあたりの記憶はあんまりないんだけど、目が覚めたら病院だった…通り魔にやられたんだって」

マルコは懐かしむように傷跡をさする。

「そんな私を助けてくれたのも…偶然奈良に来てた明さんだったっけ…通り魔をやっつけて病院に運んでくれたの

お礼を言ったら、『可愛い子を助けるのに理由なんかない、ね』
だって

明さんも美香も、そんなわがままで人を助けちゃう人なんだよ」

「……」

自分もそうだった…魔法で契約を結ぶ規制がゆるくなっていて…暫定的な主であった明が命じていたとしても
本来厳格に魔法使いを選ぶべきであるはずの自分が彼女を魔法使いにしたのも、理由なんてなかったのかもしれない。

「だから私も、我儘で人を…ブランクにされた人たちや神賀戸くんを助けたくなったんだよ…だめ、かな？」

「ダメも何も、理由としては十分に合格点よ
いいわ、貴方が私の主人とこの大天使長補佐、片割れにして最後の剣サンダルフォンが認めてあげる」

「サンダル…フォン？あうっ」

サンダルに電話がくつついたようなものを想わず連想し、マルコは天使に羽でぺしぺし叩かれる。

「長いならエリヤでいいわ、よろしく!!」

「…うん！私はマルコ、晶水マルコだよ。よろしく！」

二人は選ぶ者と選ばれるもの、そして仲間として握手（翼）を交わした。

「じゃあ、メイに連絡しないね…自動筆記の仕方わかる？」

「え？…えっと、それって私にもできるの？」

「魔法魔術の基礎中の基礎だからね。これから魔法も練習してもら
うわよ」

…そんなこんなで、マルコは明への連絡を終えて集合時間をできる
だけ誰も来ない午前5時に決めたのである。

「いつてきまあす!!」

「おおいつてらっしゃい…ってまるこー、まだこんな時間だぞお？」

のんびりした口調で話しかけてくるのは新聞紙を片手に持ったマル
コの父、あきらみすけいいち晶水計一郎。

水質浄化施設の警備員で、近所の野球チームのベテラン監督もやつ
ている。

余談だがマルコの感覚の鋭さはこの父とマルコとのキャッチボール
中に覚醒したとか。

「いいのー、ちょっと明さんのところ行ってくるー」

「ふむ…」

計一郎は納得したようにかえすと、再び新聞を広げないように見入
った。

「へえ、最近はどういうぬいぐるみが流行りなのか…」

新聞には最近大人気中の蜘蛛のぬいぐるみについての記事が掲載されていた。

喫茶店アヴァロンのドアを開けると、そこにはホットココアを用意した明と

昨日とまったく同じ学ラン姿の蓮がいた。

「魔法少女…続けるみたいね？」

満足そうに明が言うと、神賀戸は深くため息をついた。

「まったく、説明しなかった僕も悪いが…あんな理由で決められるとは」

「護られる側の人はおとなしくしなさい、君はしばらく魔術も殆ど使えないんだからね」

ぐ…と蓮は黙り込む、先日意味を奪われかけてからただでさえ無駄使いできない魔力を大幅に失ったのだから仕方がない事だった。

「早速だけど、ちょっと感覚を済ませてもらいなさいね？」

「え……………っ!!」

言われるがままに肌の感覚を研ぎ澄ませたマルコは、ある一点に強烈な悪寒を感じた。

まるで皮膚を剥がれた他人の体に触ってしまったような悪寒、マルコは実際そんな事は経験をしたことなどないが

感覚としては非常にそれに近い怖気を感じてマルコは身を縮こませる。

「ブランクが公園に現れたわね。
今はまだいいけど、このままだと遊びに来る子供たちからルーンを奪われる可能性があるわね。」

「……ッ！」

マルコはブレスレット状のドラウプニルをぎゅっと握る。

「さあ、魔法少女出勤よ、ね♪」

明がドアを開けると、マルコは駆け足で公園へ向かおうと走りだす。マルコの視界に追うように自動筆記が現れる。

子供は総ての生き物の中でも特に豊富な可能性と意味を持っているのね

特に魔法使いは存在するだけで大きな意味を持つから奴等にとっては極上の獲物

だからブランクたちは大人より優先してマルコちゃんのような子供を狙うから注意してね B y 明

「それで、その集めた意味はブランクには与えられずそれを作った魔術師へ魔力を供給し続ける…」

だから新しく意味を作る程の魔力をブランク本体に与えて魔術師とのラインを切ればいい、やり方は昨日のとおりよ！」

「…うん…！？」

道中にマルコは、反対に歩く銀髪の少女とすれ違つた。

> i 3 5 8 4 — 5 1 8 <

流れるような銀髪をツインテールに結び、漆黒のマントを羽織っている

すれ違いに互い見た横顔は、何処か人形のように無機質で…

急に立ち止まって振り返るが、その場にはもう誰もいなかった。

「…どうしたの？」

「…何だろう…とにかく急がないと！」

気を取りなおして公園の近くまでたどり着くと、その存在がおぼろげに見えてきた。

反射する光も、影もない、均一に白い人型の何か…ブランクだ。

数は2体、霧の漂う公園を徘徊するその姿はどこか大切な物を無くし、それを探す様を見るようで

それを見るマルコの心にずきりと憐れみを焼き付けさせる。

「…私が、助けるんだ…っ！！」

決意を言葉にして、右手に装着したドラウプニルをブレスレットから腕輪の大きさに拡大する。

「いける？」「うんっ…大丈夫！」

マルコは頷くと右手に装着したドラウプニルを掲げて表面の呪文を読み上げる。

「王の財宝よ、流れる円環の渦よ、再顕現せし『王国』^{マルクト}の魔法を示せ。私は『王国』の魔法使い！」

フエオ・ユル・ウル・アンスール!!」

> i 3 5 8 5 — 5 1 8 <

ゴオツ と、腕輪を起点に眩い魔力の奔流がマルコを包む。

「ふえあ…!？」

変身の最中に目を開けたマルコは、自分の服が破けるように大気に消えて行くのを見て慌てる

大丈夫よお、変身を解除したら戻ってくるからね♪
よっしゃ良い絵が撮れたわ…ね♪ B y 明

明はマルコを落ちつけようと自動筆記を送るが、何処から見ていたのだろうか思考が駄々漏れしているような文が入っている。

「うう…もうお嫁にいけないかも…」

髪の色がレモン色に変化し、涙ながらにそう言うマルコを草色の服と皮によく似た素材の装甲が包む。

消えた服とは逆に大気から再生するようにマルコの身に纏われていき、マルコは最後に現れた草色のベレー帽をかぶる。

この瞬間魔法の知識がマルコの中を駆け巡り、王国の魔法使い…否、魔法少女マルコがこの世界に顕現した!

その魔力の奔流に誘われるように、ブランクたちは無音の雄叫びを上げながらマルコに殺到する。

しかしその2体がマルコに接触する前に、マルコは足元にドラウプニルの『環』を出現させそのまま一気に飛びあがる。

地面から離れる瞬間に土が盛り上がり、マルコの跳躍を助けるそれはマルコが地面の一部において生命の流れをコントロールした

事によるものだ。

数メートル離れたところに着地したマルコは増幅した自分の運動神経に感動したかのような高揚を感じる

しかし一瞬の後にマルコの増幅した感覚はブランクが即座に次の行動に入った事を知覚し、思考を切り替えた。

「っ！... エリヤ！」 「オツケーー！」

エリヤはマルコの指示と同時に県の姿になりマルコの手握られる、そして迫るブランクの拳を受け止めた。

そして拳をあてたブランクの胸の前にドラウプニルの環が現れる。

「やあああああー！」

そのままマルコはブランクに大気中の魔力を循環させる

はじめから大気を流れていたように幾筋もの光が束となり、集束した黄金の光がブランクを貫いた。

やがて光が止み、ブランクが崩れたところでマルコは剣と化したエリヤでブランク自身を... ブランクと魔術師をつなぐ魔術の繋がりを断つ。

ザン...！！

という物質的な音と共に、ブランクは人間へと戻り意識を失って倒れた。

もう一体のブランクにも環を使って魔力を循環させようとマルコは振り向いた... ところで目を見開いた。

ブランクの体の表面にたゆたうように、一文字の紋様が浮かんでいる... それは始めからそれに刻まれていたのか
それとも新しく浮かんだのか...

『魔術師 G a n ? n c i a ー 0 0 の名において、この物に新たな意

味を加える、そは羽ばたく物なりや』

録音されたような少女の声とともに、メキメキとブランクの腕の形が変わる…それは明らかに人間の腕のシルエットではなく、翼だった。

「・・・いけない！！マルコ、早く魔力を…」

エリヤが叫んだのと翼を持ったブランクが羽ばたいたのはほぼ同時だった。

「く…！！」

マルコが急いでドラウプニルの環をブランクに向けて飛ばすが、それを上回る速度でブランクは宙を飛び回る
新たな意味を得たことを噛みしめるようにブランクは空を縦横無尽に飛び回る。

その様を見て剣の状態のエリヤ歯噛みする

「く…っどうすれば！！」「大丈夫！」

マルコはエリヤにそう返すと、自分の周りにドラウプニルの環を4つ出現させる。

一つは細く大きいリングが自身を環状に覆うように、3つは自分の背中と両肩周辺を高速で回転している。

「…飛んでみるっ！！」

マルコはそう言って力いっぱい地を蹴り飛び上がった、すると周囲の環が空気の流れを操り始める

それは飛行機のジェットに似ている原理で、環と不思議な力で繋がったマルコを持ち上げた。

「そんな、こんな魔法を…思いつきで!？」

「なんとかっ…わああ!!?」

少し環のコントロールを誤り公園を覆う林に突進してしまうが、自身を覆う環に当たりなんとか自身の身は守れた。

「ちょっと、大丈夫?」「うん、今度は…いけるっ!!」

マルコは体勢を立て直して環を総べて地面に向けて空気の流れを噴射し

バオウ!! という轟音と共にマルコの身は空高く飛び上がった。あとは周囲に浮かせた環が姿勢の制御と飛行の補助をする筈だ。

「凄い…過去様々な魔法使いにこの力を与えたけど、こんな使い方初めて見たわ…」

「ちょっと前に聞いたんだ、飛行機とかヘリコプターって空気を押したりかき分けたりして飛ぶんだって」

ひょっとしたら…この子は科学の発達した現代においてとんでもない才能と発想を持って生まれた魔法使いなのかもしれない…
エリヤは素直にそう感じた。

「メイ……あんだ凄いの選ばせてくれたわね…っ!!」

「…いくよ!!」

エリヤの独り言は聞こえなかったようで、マルコは空気をかき分けて空に見えるブランク追って飛行した！

『……………！！』

ブランクは声もなく驚いた様子を示した、空を飛ぶ意味もなく仇為す者が空を飛んで向かってきたのだから当然である。

「ドラウプニル、巡って！！」

そう言っただけマルコはブランクに向かって環を発射した。
ガチン！！ という音と共に環はブランクを細くして大気からかき集めた魔力をブランクを通して循環させる。

『……………っ！！……………っ！！』

ブランクは魔力を循環させられたショックでそのまま墜落し、マルコは最高速度でそれを追う。

「間に合えええ！！」

マルコはブランクの落下地点に環を作り、大気を高密度で循環させ空気のクッションを作った。
そしてふわりとブランクの体が浮いた瞬間に、マルコがブランクと魔術を切り裂いた。

「……………ふう、修正完了。」「お疲れ様、マルコ」

フォン とマルコの服と髪が元の姿に戻り、どっと疲れが襲ってくる

る。

「…はう…」

「まったく、いきなり空を飛ぶなんて無茶をするからよ
次はもうちょっと改良しないと、精神も体力も持たないわよ?」

エリヤは驚きながらもマルコの飛行魔法の方式と、その難しさを理解していた。

科学と神秘を組み合わせたまったく新しい魔法…しかしその制御にはそれが単純である程負担がかかる、体にも心にも。

「うん…もうちょっと、頑張らないとね。…もうこんな時間かあ」

マルコが腕時計を見る、体を動かすと感じる時間は早いもので
もう時間は7時を過ぎていた、場所は公園や学校から遠く離れた見知らぬ住宅街。

「頑張る前に、楽をするのも肝心よお、ね?」

エンジンの爆音とともに声が聞こえた先を振り返ると、そこには大型のジープに乗って手招きする明の姿があった。

「学校近くまで送るわよ、ね?」

「ええ?…でも車での登下校は」

「悪魔で近くまでよん、ほら早く早くねえ」

ニュアンスに問題があったような気がするの、それが悪魔の甘言

に似ているからだろうか
しかし背に腹は代えられず、マルコは蓮と共に明のジープで学校へと登校するのだった。

その日の夜…

摩天楼の上から街を見下ろす少女の姿がそこにあった。

髪は銀色をツインテールに縛っていて、漆黒の外套の下からは甲冑を取り付けたレオタードのような扇情的な衣装が覗いている。

そしてその瞳は何処までも暗く深く…抑揚のない声で機械的に『誰か』に告げている。

「…ブランクがまた二体、それも改造版までもが修正されてしまいました…」

『…さしたる問題ではない、が…このままでは失態を《狗》と《神》の入り口《》に勘付かれるか…』

それは術式を通して少女の脳に直に送られる男の声だった。

少女は不快な顔一つせず…それどころか感情も見えない表情で男の指示を待つ。

『魔術師G a n ? n c i a 1 0 0 の名において、ジュリア・F・ヘンデルに暫定的思考の猶予を与える。』

その言葉と共に、少女の指がピクリと動く。

『修正者を探せ、それで邪魔と判断したならば 殺せ』

> i3590 — 518 <

あまりに冷たく、欲望と怠慢に満ちた声で指示された少女は頷いた。

「……………はい」

続けて男は指示を送る。

『意味の採集も続行しろ、魔力量もまだ話にならんからな』

「…はい」

返事を返した少女は、街を見下ろして手をかざす

すると、町がどんどん光を失っていき…霧に包まれていく。

少女は街の中に標的たりえる人物を見つけると、両腕を広げて外套に魔力を送る。

外套は装着者の力に呼応するように形を変え、一對の巨大な翼と化した。

「行くのか？ジュリ…」

黒い天使が少女の傍らを飛ぶ…しかしその目は少女を見ていない、まるで返事を既に期待していないかのように。

「うん・・・」

しかし、返された返事に驚いたように少女を見るが、彼女の瞳は相変わらず暗く、深く…

「……まだまだ……ということか……っ」

黒い天使は憎々しげにそう言つと、切っ先のない剣……所謂カーテナと呼ばれる儀礼用長剣の形に変化し少女の手に握られる。
そして、少女は漆黒の翼で夜の闇に飛び立った。

A r c a n a：閑話休題、登場人物・用語紹介

人物

> i 3 6 3 3 — 5 1 8 <

【晶水搏子（あきらみず まるこ）】

本作の主人公にして、魔法使い明綾乃から【王国】の魔法を授かった魔法少女。

それまではごく普通の小学生だったのだが、2年前に奈良への家族旅行中通り魔に瀕死の重傷を負わされそれを明に助けてもらったという過去を持つ。

それ以来「誰かの役になてるような人になりたい」という願望を持つようになる。

それ以来類稀なフオーロ体質の持ち主となり、美香の良き相棒を勤めているが

美香の影響か「たとえそれが自己満足でもいい」とも思うようになっている。

また、警備員で近所のベテラン野球コーチを務めている父を持ち彼とのキャッチボールで動体視力の良さを含めた鋭敏感覚を覚醒させる。

しかしやはり普通の女の子なので運動神経そのものはあまり良くないし変身後も魔法使いの中では運動神経が悪い方である。

さらに感覚はよくても恋には疎く、太一の猛烈なアタックにも気付かず彼の事を「ちょっと乱暴だけど優しくていい人」と評価している等の鈍感さも見せる。

実行委員の副委員長を務めている。

> i 3 6 3 9 — 5 1 8 <

【金奈美香（きんな みか）】

マルコの幼馴染にして親友。先祖代々生粋の日本人なのだが生まれ

ついて色素が薄く

どういう訳だか外国人のような金髪碧眼を生まれながらにして持っている。

その奇妙な外見故か日常的に周囲から一歩引かれて見られる生活からか

「やりたい事をやりたいと思った時にやる、それが自分というものだ」と独特な美学を持ち

その有り余る行動力からクラスのムードメーカーとなっている。

しかしいくら外見が特殊で行動力が高くとも普通の少女でもありそんな美香を尊敬しつつもフォローに廻ってくれているマルコの存在は美香からしても有難いものだろう。

美香からすればマルコを尊敬している面もある。

実行委員の設立者にして委員長を務めている。

> i 5 8 5 9 — 5 1 8 <

【葛葉太一（くずのは たいち）】

実行委員の体力担当、マルコのクラスメートにして鈍感な彼女への愛に生きる頑張る男の子。

実家が古くからマイナーな古武術を伝える道場で、太一も僅かながら鍛えられている。

その為青銅欄小学校の番長を自称している。（実際青銅欄小学校が番長制であるかはどうでもいいとして）

今までだれもが彼の実力を認め彼が番長を名乗ることを承認していたが

第一話で、それもマルコの目の前で蓮にあっさりと組み伏せられてしまう。

番長としても恋する男としてもプライドを傷つけられた彼は果たして今何を想うのか！！

彼の明日はどっちだ！！？

>i5860—518<

【神賀戸蓮（かがと れん）】

マルコ達の通う青銅欄小学校3年3組に転校してきた謎の少年。その正体は十字教の魔術騎士団に所属する魔術師で、青銅欄にはびこるブランクを生み出す魔術師の討伐に来た。

第一話で彼が見せた魔術はブランクに一時的な仮初の意味を与えることで人間に戻す魔術であり

そこから彼の目的があくまで魔術師の討伐である事がうかがえる。また明を反の魔法使いであることから敵と疑ったが、後の話し合いによりその考えを撤回したが、いまだ疑っている。

しかし明の手まわしにより社会的にも明の親戚であると登録されてしまい、現在は明と同居中。

また、彼の魔術はその年齢を代償にして得た魔力の絶対量によって行使できる魔術であり

ブランクの攻撃によって魔術使用不能であっても、またしばらく経てば魔力量も元に戻るとのこと。

質年齢は30歳超。

実行委員の補席であり、役割は後に決まるとのこと。

>i3160<ruby><rb>518<

【明綾乃 </rb><rp>(</rp><rt>めい</rt>><rp>あやの</rp></ruby>】

マルコ達実行委員メンバーがよく通う喫茶店『アヴァロン』のマスター。

本人いわく可愛いもの好きで、養子いわく重度ののり・シヨタコン。

小さい子が好きというのは本当で常連のマルコ達実行委員メンバーには来客のたびにかき氷やココアを無償で奢っている。

蓮いわく総ての摂理に反発する反の魔法使いで、証拠はないが現在最もブランク発生 of 犯人として有力な人物。

さらには中国・アメリカ・様々な国の混血で、日本に住んでいる経緯は全くの謎で余計に怪しいのだが
彼女を知る人物が言うには、根は善人であるという。

【エリヤ（サンダルフォン）】

マルクトの魔法使いを選定する役割を持った守護天使。
便宜上天使には3次元的な形も性も無いのだが、召喚に応じた際術者のイメージに沿った形になる。

また、神の剣の片割れであり大天使長補佐でもある彼女？は他にも様々な姿に変身できる。

最も多いのは明の召喚イメージである『マスコットキャラ的造形』と、マルコの武器である『黄金の剣』

また、双子の姉が最高位の預言者のひとりであり大天使長と言う肩書からか反発するようにおてんばでがさつな性格をしている。

用語

【青銅欄小学校3年3組実行委員】

金奈美香が構想し、設立した委員会。

一般的な実行委員のイメージとは微妙に違い、主にクラス単位で行うイベントや体育自習の監督

いわゆる【レクリエーション委員】としての役割を持つほか

転入生の案内や生徒からの相談を聞き入れるなどクラスのなんでも屋的な面も持つ。

【ブランク】

人間や動物、果ては無機物に至るまで内包する「意味^{リン}」を奪われ怪物となった物体。

生物学、物理学的に完全に人間ではなくなり「何でもないもの」として意味を求め思考もなく彷徨い、そして人を襲う。

また、ブランクの意味を求める習性を利用してブランクに呪いをか

けブランクが奪った意味を自分のものとする禁忌の魔術師も少なくはない。

また、ブランクは修正されるとブランクだった時の記憶を失うが、仮初の意味で修正されたものは

ブランクの事を思い出すと再び意味を失う危険性がある。

マルコが修正したブランクは循環された魔力を起点に己の内によりがえったものなので再発の危険性はない。

【魔法使い】

天使・悪魔との契約によってマナを操る権限を得た存在

または便宜上、生まれてから内包する運命によってその存在となることを義務付けられた者。

天使の与える権限にもよるがこの小説、【魔法少女マルクトマルコ】の舞台では

カバラの「生命の樹」とそれに至る工程に対応した種類が存在している。

歴史上の聖人や預言者もこれに含まれる。

マルクト（Malchut、王国と訳される）

権利使用者：マルコ

第10のセフィラ。物質的世界を司るそれは即ち世界を形作る大いなる円環を制御できるということである。

数字は10、色はレモン色・オリブ色・小豆色・黒の四色、宝石は水晶、惑星は地球を象徴する。

魔術的には王座に座った若い女性で表される。

守護天使は片割れにして最後の剣エリヤ・サンダルフォン。

クリフト（Qlippoth、反と訳される）

権利使用者：明

虚数のセフィラ。通常、反と訳されるがその真髄は伝えられていな

い。他のセフィラとは存在の定義そのものが異なり。クリフォトは生命の樹の対に位置する。

【魔術師】

魔法使いの起こす魔法や神話上の奇跡を人工的に発現する技術を持った一般人の事である。

しかし魔法使いのような権限をはじめから持っていないので先ずは超常現象を起こすための対価として魔力を稼ぐ必要が出来てしまう。また魔法使いもこの技術を得ることはできるが、それは魔法の種別における弱点を克服するための手段であり魔術を行使するには魔法に使う分とは別に魔力を稼ぐ必要がある。

寿命や意味或いは人間としての生活を一部放棄するか、難解な儀式を行う事によって魔力を得て

世界中に伝わる魔法や奇跡を再現する事によって魔術は発動する。

魔法使いと同様、幾つかの派閥や学派に分類されている。

例：ペイガン学派 十字伝承学派 ゴロアスター学派 グノーシス学派 錬金学派 仏道学派 道学派

【マナ】

大魔力とも訳され、世界とは別位相に存在する大規模な魔力の集合体。

世界で生成される魔力はマナへと還元し、マナからは世界に様々な奇跡を具現される。

（この流れを大いなる円環と言う）

天使や悪魔、そして妖怪等はマナが多くの人間の信心や願いから触発され3次元空間に生まれ出でる。

そして魔法使いはこのマナから魔力を直接引き出し、権限に応じた奇跡を引き起こすのである。

【オド】

小魔力とも訳され、人間をはじめとしたこの世総ての物体が常時発している魔力の総称。

これは大いなる円環における『この世界で生成される魔力』の事であり、物質が持つ『意味』を物体が為そうとして発せられるものである。

魔術師は与えられた意味に反発する事で魔力の過剰を生み出し、魔術を行使するための魔力を貯めるのである。

たとえば、代償行為に大掛かりな儀式が含まれるのは『その儀式の準備から実践』までが意味に反する事であり

それに費やした労力や時間がそのまま魔力として魔術師に貯めこまれるのである。

G e b u r a h : 対決、決闘と襲撃

事の始まりは前回の戦闘が終わってすぐの事である。

マルコと蓮は学校近くの路地裏で降ろしてもらい、なんとか時間内に登校する事が出来た

いつも通りの日常、昨日からどこか狂ってしまったけどいつも通りの学校の光景を見てマルコは安堵していた。

「おはおーマルコー♪」「おはよう、美香」

隣同士の席であるマルコと美香は挨拶を交わす。

「どうしたのー？なんか疲れてるっぽいけど…あ、解った！」

「にゃ！何！？」

よもやもつばれたのではないか、そう思ったマルコは身をこわばらせるが

「マルコ、昨日の早起きで朝のジョギングに目覚めたでしょお！！健康的だけどねえ、あんまり朝早すぎにジョギングするのはやめといた方がいいよお？ジョギングの発明者は朝のジョギング途中で心臓発作起こしたんだってよー？」

「あ、あはは…気をつけるよお」

額にいやな汗を浮かべつつ苦笑いするマルコを、美香は悪戯っぽい笑みで見る。

「で？何だか早くもジョギング仲間が出来てるみたいだけど？」

美香の視線の先で蓮は教室の端で相変わらず面倒臭そうに頬杖をついて窓の外を見ている。

「相変わらずとっつきにくそうなのに、何気にマルコフラグ体質だよねい？」

「な、なにフラグってえ？」

マルコは顔を赤くして蓮を見る。

―でも本当に蓮くんって私達にはあんまり自分から話そうとしない気がする…メイさんとはあんなに話してるのに

まじゅつしつてことも、まだ一日目だけど…仲間なのに解らないことだらけだ…―

そう連を見ながらぼーっと考えていると、美香が小悪魔の笑みでニヨニヨとマルコを見ている事に気付きさらに顔を赤くする。

「な、何い？」「いやあゝ、脈ありなんだねい？」

「ちがうってばあ」

とマルコが恥ずかしそうに言っているのを、さらに美香を挟み隣の席に座る男子が聞いていた

…昨日蓮に投げられ逃亡されあまつさえ放置されていた不運の男、太一である。

いや、その事は既に太一はほとんど忘れかけていた

自称番長である以上、無闇に過去を根に持つのは彼の矜持に反するし、何より太一はうたれ強く何があっても翌日には平気な顔をして登校している、そんな少年なのだ。

しかし太一は今日ばかりは、小学生の使用者を対象とされた強度の机がひび割れんばかりに怒りを拳に込めていた。

「…っざけんじゃねえぞ、転校生ええ…っ!!」

そう、太一はマルコに好意を寄せているのである。

それはもう趣味代わりのケン力を辞め、彼女の敵であるならば上級生だろうが中学生だろうがねじ伏せ

彼女に例え気付いてもらえなくとも猛烈にアタックを続ける程にマルコの事が好きなのである。

そんな彼が今のマルコを見て、嫉妬の怒りに震えない事が果たしてあろうか、いやない、反語。

チャイムが鳴る直前に、太一は絶妙なコントロールで教室端に向かってある物を投げた。

「…何のつもりだ、あいつ…?」

蓮は机の上にジャストで乗った物体を怪訝な顔で見る。

何故か、蓮の机の上に洗いたての靴下が乗っていた。

「それじゃあ葛葉、この問題解いてみる」

算数の時間に太一が指される事は多い、それは彼の思考が常にマルコの方へと偏っているためである。

もちろん授業などほとんど聴き飛ばしているも同然なのだが、ここに美香のサポートが入るわけである。

「マルコに見直させるチャンスかもねい」

その一言を聞いた太一は、黒板に向かうまでに何気なく教科書の今周囲が開いているページを開く。

通常、勉強と言う者は何度も練習し勉強を重ねることじゃないか知識へと昇華する。

そう、予習復習をちゃんとしてこそ勉強なのだ…しかし、それを太一は凌駕した。

「答えは、3分の2だ!!」「せ…正解だ、やればできるじゃないか葛葉!!」

愛とは時に奇跡を起こす、それがたとえ理不尽な者でも想いの力に勝るものなど無いのである。

太一はものの見事に問題の答えを言い当てて見せた、途中式まで確実に。

それも太一の類稀な集中力が美香の発言によってへんなスイッチへと切り替わっただけなのだが…

「じゃあ次の問題をそうだな…神賀戸やってみろ」「はい」

至極面倒くさそうな返答をし、席を立つ蓮だが…黒板への道のりにすれ違い太一は蓮をものすごい形相で睨んでいた。

蓮はそれに会えて気付かないふりをして問題を見て、ため息交じりに答える。

「…5分の3」「…神賀戸、途中式も書くように」

先生の返答を受け蓮は途中式を描く、通常の途中式に加え証明の為に数式を幾つも幾つも…

「すみませんでした、完敗です」

やがて黒板が埋まったところで先生が土下座した、どうやら先生なりに引つ掛けを加え難解にした問題だったようだ。

さらに証明式のレベルが小学校レベルから最早一個につき黒板の半分を埋めるような高等数学の域まで達している。

理解不能の事態に太一は顎が外れんばかりに口をあけていた、周囲もまた啞然とする。

「……って頭いいんだなあ……」

マルコは、「魔術師って頭いいんだなあ……」と言ったのだが、呆然としていた太一にはそれが後半しか聞こえなかった。

「神賀戸君って頭いいんだなあ……」と脳内補正をかけてしまうのは、ライバルを持った恋する少年の性か

太一は机のひび割れをさらに深くした。

続いて体育の時間：バスケットボールの試合となり、案の定太一と蓮は敵同士のチームとなる。

「くくく……ちよつとは驚いたが、眼鏡をかけてる時点で頭いいっていうのはだいたい予想が付いてたんだよ
今度は晶水の視線、いただくぜ!!」

「思考が駄々漏れだねい」

背後に廻っていた審判の美香の言葉を無視しつつも、蓮と太一はジャンプボールを取る為に相対する。

「今朝のアレは何の意味があるのか教えてもらおうか……?」

ここにきても眼鏡を外さない蓮の問いに、太一は胸を張って答える。

「決闘の申し込みだ!」「それなら手袋を投げろ」

> i 5 8 5 8 — 5 1 8 <

蓮の至極冷徹なツツコミを受け、太一はこめかみに青筋を浮かべる。

「伝わりやいいんだよ…この試合、勝たせて貰うぜ」

太一の溢れる熱意と、蓮の氷の視線が混ざり合い、小学生のバスケットからぬ緊張感が周囲に生まれる。

……美香が、高らかに宣言した。

「すたーとっ!」

美香がボールを天高く放り投げ、二人は跳び上がる。

「……っ!」

太一が驚いたのは、連が予想以上に高く跳びあがった事だった…恐らくは体力において小学生離れした太一にも匹敵するであろうジャンプ力である。

しかし、背丈は太一の方が上だった。

…バシィ!!

太一が弾いたボールは、的確に自分のチームの少年の手元に向かって空中を走る!!

「取れ安田（仮）あ!」

「えっ！あ！？」

二人の全力飛翔に呆然としていた安田（仮）少年は慌ててボールをキャッチするが…パシっという音と共に何者かに奪われてしまう。

「え…？」

安田（仮）少年が振り返ると、そこには既に蓮が居た。

「…速え！？クソッ…完璧超人かてめえは！！」

太一は大急ぎで蓮に迫りボールを奪おうとする…しかし蓮は最小限の動きでそれを回避、ドリブルしながら敵ゴールへ向かう。

「さっきの言葉、そのまま返すぞ」

太一と離れる瞬間にそう言った蓮は、ゴールから5m離れた位置からボールを投げ…的確に3pシュートを決めてしまった。

「……あゝ、ココアがうまいわぁ」

翼で起用にコップを持ちココアを煽るエリヤの横で、明は楽しそうに笑う。

「しかし、蓮くんもややこしい事に巻き込まれてないかしらねえ？」

「はぁ？あのおっさん魔術師がマルコに持って来たようなものでし

ようが、こんなややこしい事態」

エリヤの言葉に、明は首を横に振る。

「違うの、彼37歳とか言ってるけど…それはあくまで生きた年月彼の本質からするに、きつとずっと9歳のままで成長が止まっているのよ」

「ふうん、だから？」

明はにっこり笑って答える。

「負けず嫌いの子供のまんまなのよ、彼も」

「…やるじゃねえか、ビンゾ」

「それはこの眼鏡の事を指してるのか、靴下男？」

ボールを手にして威嚇する太一を前に、蓮は挑発するように言う。
太一はアイコンタクトで周囲のチームメイトに指示を送る。

「チームワークで征そうとしても無駄だ、僕とお前ならともかく…戦力差が大きすぎると思うぞ？」

しかし、太一は大きくボールを振りかぶる。

―所詮子供か、ゴールに近い奴に投げようが…取ればいいだけの事…
―

そう思い蓮が最小限の動きでそちらに向かおうと足の形を整えたの

を、太一は見逃さなかった。

「…考えが足に出てる…ぜつと！」

太一は不自然に振りかぶった体制のまま、手首のスナップだけで一番近いチームメイトにボールを渡した。

「なっ…！？」

蓮は急いで太一の場所へ向かおうとするが、急激な変更で体制が追いつかない。

あくまで蓮の機動力という売りは、『的確かつ最小限の動き』で成り立っている。

それが整えられないままの蓮は、普通の小学生のそれと同じ機動力のまま走り始めてしまったのだ。

「しまっ…！！」「お先に…！！」

対する太一は鍛えた体力に、仮実行委員としてクラスメイトと付きあつて来たチームワークがある。

まさに太一は昔からその座を譲らない3年3組の砲塔なのである。

「入れえええええ！！！」

「…いつけええ太一いいい！！！！」

太一はゴールからコートの半分以上も離れた位置からがむしやりにボールを放った。

しかし太一のコントロール力は、皮肉にも蓮が今朝の試合で既に確認していた

ボールはゴールの環にぶつかりほぼ垂直に跳ね上がり、吸いこまれるように輪の内側へと入っていった…

「…決まったーっ！！これは離れすぎです、最早4p！！壮絶の4pシュートですよー！！」

あまりにも奇跡的な事態に興奮した美香がテレビの試合の司会よろしく解説し、太一のチームに4p加算する。
ピピピピピピピピ！！

「試合終了おー！！」

「「「うおおおおおおおおおおおおお！！」」」

観客も見学も太一のチームも、果ては負けた蓮のチームメイトさえ感動のラストに打ちふるえた。

「すごかったね、太一君」

「や、やーそれほどでもないぜ本当に、あっはっはっはっはー！！」

感動したマルコの一言が太一の心を昇天間近まで癒しているところに、蓮がやってくる。

「…」。蓮は何処か納得できないように俯いているが、太一はその肩を叩いて言う。

「なーに落ち込んでんだよビンゾコ、良い勝負だったじゃねえか」

「……………君は僕の事を毛嫌いしていたのではなかったか？」

蓮の問いに太一は、空気中の何かを捨てるように手を大きく振る。

「かつ、もうそんなことどうでもいいんだよ。俺だって昨日あんなにぼろ負けしたんだしな」

「ただだよ、俺は過去の負けはどうでもいいってのが信条でね。」

それに、俺が授業でここまで全力でやって勝ったのは久しぶりだぜ？今はもうすげえとさえ思っぜ。」

そう言って握手しようと手を差し出す太一の言葉に暫くキョトンとした蓮だが、ふっと笑ってその手を取る。

「…まったく、頭軽いな君は…靴下男。」「うるせえ、ビンゾコ」

青空を背に、戦友たちは握手を交わす。

「ああ、スポーツ万歳だねい…」

感動の涙を流しつつ、美香はおもむろにそう言った。

「そろそろかしらねえ、マルコちゃんが戻ってくるのはね？」

「……………あのね、メイ」

明が背伸びをしてこれからの仕事に備えようとしているところを、

エリヤは呼びとめる。

それは、明とエリヤにとって呼び呼ばれ慣れた呼び名だった。

「…メイ、本当に止めなくてよかったの？」

少なくともあの子は、あの時の事を覚えてる…いや、忘れていないと言った方がいいかしら…

あの子には、それだけでもこれからつらい事になる…それは、貴方にとっても…」

「…エリヤ、私とあなたの仲じゃない…解ってるのならないでよねえ

少なくとも私とあなたにとってはお互い了承済の事のように、ね？貴方は嘘は言ってない、必要な事を言っただけ…感謝するわ、それと…」

言いかけたところで明はぴくりと眉を動かし、何もない宙を見る。その先にある異質な存在を感じ取ったのだ。

「おっと、いいタイミングで現れたわね、割と大物も…ね」

「いつけない！速くいかない…」

明の言葉と共にエリヤもそれを感じ取り、急いで玄関口へと飛び制止する。

「ねえメイ」

「ん？」

「私達、まだ…相棒かな？」

エリヤの問いかけに、明は微笑んで俯く。

「…ごめんなさい、相棒」

一方で、マルコ達は体育の時間の事を語らいながら帰路についていた。

「神賀戸くんもすごいねい、まさか投げるだけじゃなく太一と互角の勝負までするときた」

「でも、太一君のシュートもすごかったよ？」

「いやあゝははは、そんなことあるぜ！」

マルコのほめ言葉に感極まって鼻を伸ばす太一に、冷徹な目で蓮が口を開く。

「修行不足だな。靴下がもう少し鍛えてさえいれば、ポテンシャルの面で僕が負けるよ」

靴下、靴下男は、蓮が太一を呼ぶ時の呼び方として定着してしまっていた。

「なっ…負けたやつが何を言ってるんだビンゾコんにやろうっ！」

太一はむっとして蓮をはがいじめにしようとするが、するりとかわ
されて後ろを取られる

「ふん、一回の勝ちで図に乗るなよ靴下男」「く、上等だビンゾコ
！明日も決闘だかな！」

「うや、やめてよ二人ともお」「やつはっは、面白いコンビだねい
」

何気ない会話を楽しみながら歩いていると、ピクリと眉をひそめた
蓮がマルコに視線を送る。

「……！！」

マルコもまた、ある存在を感知し身ぶるいする。

有機的で痛々しくさえ感じる感覚、ブランクだ…そしてもう一つの
強い力

「何？…この感覚…」

マルコ、今どこに居る！？ B Y エリヤ

目の前に自動筆記が現れ「ひゃっ」と声を上げたマルコは、すぐに
頭の中で返事を描く

今は太一と蓮、そして美香…友達と下校中である。

えと…今は家に帰ってる途中だよ？通学路！ B Y マルコ

急いで…え？この感じ…マルコに近づいてる…！！

魔術師：いや、魔法使いだ！！すぐそこに居る！！　Byエリヤ

エリヤの自動書記を読み、周囲を探る時にはもう遅かった。
空を覆うのは数多くの刃、無数の蛮刀である。

それが雨のように降り注いでいる事を知覚した時には、既に刃はマルコ達の通う通学路に殺到しようとしていた。

「……………！！」

マルコがキュツと目をつぶる。

ガギギギギギギギン！！！！！！！！

多くの刃同士がぶつかり合う音が響き、友達の存在感が消える。
マルコが恐る恐る目を見開くと、マルコと周囲の人間だけを避けるようにあちこちの地面に蛮刀が突き刺さっていた。

周囲は濃い霧に包まれ、美香達はビデオの一時停止のように動かない。

唯一動いているのはマルコと、蛮刀の出所を睨む蓮だけである。

「これって、一体？」

「非観測地帯、魔術関係者のみ入る事を許される魔法使いの張る結界の一種だ。」

蓮はマルコの問いに答えると、さらによく目を凝らす。

「邪魔しないで、エノク」

少女の声が、灰色になった空に響いた。

「方法を考えろ、ジュリ…結界を張る私の身にもなれ」「…関係無い。」

空からマルコ達を見下ろす二つの影は、二つとも空を飛んでいた。片や剣先の無い剣が浮遊しており、片やで背中に生えた広く黒い翼で飛ぶ少女の文句を返している。

「魔法使い…私と同じくらいの子…？」

「…ジュリア・F・ヘンデルの名において告げる、この手に集え威光の剣束」

少女が唱えると地面に突き刺さった壺刀がその手に集い、刃で形作られた巨大な手となる。

「ジュリアだと？…やばいマルコ、奴の狙いは僕たちだ…！」

「待つて…！えっと…ドラウプニル、座標固定！」

マルコは本能的な知識で自分と蓮の周囲にドラウプニルの環を出現させる。

「転移…！」

マルコがそう叫ぶと、非観測地帯の内一通りの少ない場所に別の環が生まれ

瞬時にその環の場所と自分達の場所が入れ替わるように転移した。

「これで、巻き添えは少なくなる…かな？」

「上出来だ、後はあの魔術師…いや、魔法使いだ」

蓮がにらんだ先には、二人を追って来た少女が刃の腕を振りおろそうとしている。

「っ…風を…！」

とっさに手を伸ばすマルコと少女の刃の間に大規模な環が広がり、少女に向かい高密度の風が吹き荒れ刃を腕を受け止める。

「マルコ！避ける…！」「え…！」

蓮に呼ばれてマルコが気付いたときには、少女はマルコの眼前に降り立って構えていた。

巨大な翼は形を変えて外套となり、その手のひらには眩い魔力の光から引き抜くように一般的に知られる形状の長剣が塚から刀身へと光が収束するように形作られていく。

「きゃう！？」

半ば倒れるように辛うじてマルコは少女の剣撃を避ける、刃の触れた髪が切れて二人の間に舞う。

そのわずかな間に蓮は少女の顔を見て、その正体に確信を得る。

> i 3 9 5 9 — 5 1 8 <

「…異端騎士ジュリア・フリードリヒ・ヘンデル！？何故こんな処に、何故僕らに剣を向ける…！」

蓮が声をあげると、ジュリアと呼ばれた少女は動きを止めて驚愕の

瞳で蓮を見る。

「教会騎士…知られたからには、殺さないと…」

ジュリアはゆっくりと蓮の方に向きを変え、剣を持ち直す。

「待つんだジュリ!!」

するとジュリアの周囲に浮いていた剣先の無い剣から、凜といった女性性が放たれる。

「殺しちゃだめだ、そんなことしたらもう戻れない!!カインのところに!!」「…っぐ!!」

剣がそういうと、ジュリアの手に持たれた剣と空中に支える力を失って地面に落ちていた蛮刀が光の粉となって四散する。

「んう、うあ…にゃあ…ああっ!!」

ジュリアは締め付けるように頭を押さえ悶え苦しむ。

すると再び外套を翼に変化させるとその翼で全身を包み、砲弾のような速度で上空彼方へと飛び去った。

「ジュリ!」「待て!…メタトロンなのか!？」

ジュリアを追いかけようとする剣を呼び止め、蓮は問い詰める。

「…頼む、騎士団には知らせないでくれ…もう少しなんだ!!」

メタトロンと呼ばれた剣は凜とした女性のような声を残すと、高速

でジュリアの後を追いつび去った。

「はあ、はあ…お姉ちゃん!？」

今になって追いついたエリヤも飛び去った剣を視認するが、メタトロンは何も返す事無くはるか空の彼方へと飛んでいった。
倒れたマルコは、ただ皆の声を聞き飛び去った二人を見ていることしかできなかった。

「ジュリア…ちゃん？」

新たに現れた魔法少女

そして、彼女から感じたブランクの気配

それに言いようもない不安と疑問を感じながら

ただマルコは空に手を伸ばし、『敗北』を噛みしめた。

G e b u r a h : 対決、決闘と襲撃（後書き）

非観測地帯【魔術】

己をはじめとしたあらゆるものの観測があつてこそ、物体はそこに存在する。

これは科学的に解明された事象であり、魔術にも幅広く採用される理論である。

しかしこの裏を返せば観測されないものはこの世に存在しないか、それもあり得ない。

理論上観測されていない状態の物体は漠然としたエネルギーに近いものでありそこで想像し得るものは総て起こり得る物理事象である。この場合の非観測地帯は、あえて非常識的な術式を張り巡らせる事で周囲から観測されず、干渉されない空間を作り出す結界である。

T i p h e r e t h : 対抗、強固な意志と魔法の深み

ジュリア「フリードリヒ」ヘンデルと言う女の子…

記憶が正しければ『彼』直属の十字教薔薇十字騎士団異端学派魔術騎士

『魔女の讚美歌』の異名を持った未覚醒の魔法使いだった筈。日常を一瞬で非日常に変え得る力を持った魔法使いの襲撃はマルコの『常識』に多大なダメージを与えてしまった筈。

支障を来す前に対策を立てなければ、焦らずに且つ迅速に。気になるのは、彼女の相棒が口にした彼女の上司であるべき者の名前。

カイン…『彼』も呼び出す必要がありそう…ね。

魔法使い、ジュリア「F」ヘンデルの襲撃があった次の日の帰り…マルコは家の前で携帯電話に耳を充て、友達に突然の消失を謝っていた。

その日はマルコも自信を無くしたように元気がなく、実行委員メンバーもうまく話しかける事が出来なかった。

帰りになってから『昨日は一体何があったの?』と、電話をかけてきたのは美香だった。

「…うん、うん…ごめんねいきなり離れちゃって」

「ん、別にいいけどない、びつくりしちゃうからこれから気を付けてね

マルコ、鋭いくせになんか色々ぽやとしてるからさ…また襲われて入院なんて事になっちゃったら…いやだよ?

…なんて、柄にもなく縁起悪い事考えちゃうしさあ…ハハ、ごめん

ね？」

美香は謝罪し空笑いする、彼女は先の戦闘で突然マルコが消えた後大慌てで搜索したらしい。

彼女は古くからマルコの親友で、2年前の事件の事も知っていた。偶に忘れる事はあっても、あの時その場に入れなかったことを悔やんでいた事はずっと前に本人が告白していた。

今でもこんな時はとっさに思い出してしまうらしい、マルコは申し訳なさそうに携帯電話に向かってつぶやく。

「ほんとにごめんね、それじゃあ…また明日」

『PI。』と携帯のスイッチを切るマルコは軽いため息をつく。

親友にも隠しごとをしなければならない、こんな事がつらいとは思いつきもなかったからだ。

しかしマルコにはブランクを放っておくわけにもいかなかった…マルコ自身がやると決めたばかりの事だったからだ。

そして昨日襲撃してきた魔法使いの少女もまた、マルコは恐怖を感じてはいたがそれ以上に…

「あの子は…泣いてた」

マルコは左腕のドラウプニルを握り、再戦の意思を見せていた。

「…ただいまあ…！」

「おおマルコ、お友達が来てるぞー？」

マルコを迎えたのは、父である計一郎と…蓮だった。

「やあ、上がってるよ?」

「魔術師って皆人を驚かすのが好きなのかな…」

じっさい、あの明も魔法使い出ると同時に魔術師だと聞いた事がある。

蓮をそのまま自分の部屋に連れ込んだマルコはこのままだと心臓が持たないよと蓮にこぼした。

「済まないな、明に伝言と助言を頼まれて」

「助言?」

マルコが首をかしげると、蓮はマルコを見て言う。

「ああ、ついに魔法使いが襲ってきたからな」

ドクン と、マルコの心臓が痛く動いた。

「晶水、あの魔法使いに対して何かおかしいと思う部分はなかったか?」

「おかしいところ?」

「ああ、例えばブランクと同じような感覚がしたはずだ
恐らくあの魔法使いは操られていて、後ろで手を引いている奴がいる…そいつが黒幕だと

それが明と僕の出した結論だ」

蓮は淡々とマルコに言う、マルコはそれを聞いて生徒のように手をあげて蓮に問う。

「あのジュリアって子、神賀戸くんの知り合いなの？ なんだか騎士とか何とか言っていたけれど」

「ああ、彼女は僕と同じ… 十字教薔薇十字騎士団所属の魔術師だったから… もっとも、彼女は最初から魔法使いになる事が解っていたから魔法使いと定義されていたけど…」

そう聞いてマルコは、蓮やジュリアみたいな小さい子ばかりの騎士団なのだろうかと思像するが
マルコの思考を直感で察知した蓮にデコピンされ「はうつ」と額をさする。

「ジュリアの場合はある魔法を求めて騎士団の本体から離れ世界中を搜索していたんだが
僕がここに来る少し前に音信不通になっていたからね、彼女の婚約者から搜索依頼も受けていたんだ」

「こ、婚約者！？」

マルコが驚いたのは当然だ、自分とほとんど同じくらいの女の子に既に婚約者がいるというのだから当然である。

しかしそれがさも意外というように蓮はキョトンとした後に、気を取り直して続ける。

「まあ婚約者兼、僕らの上司である騎士団長からその依頼があつた

んだ。

此処では知らないが、魔法使いというのは本当に貴重な存在なんだ
…この街には何故か3人もいるようだけど…

だから彼女の場合団長が婚約という呪的名義で彼女を保護してる、
珍しくない話だよ」

「そ、そうなんだ」

マルコは冷や汗を垂らしながら彼らの世界があまりに非常識である事を再確認した。

「晶水、魔法使い」というものは何だと思う？」

「ふえ、ええと…大きな力を天使から貰って、それを使う人…だよ
ね？」

「半分は正解だ、しかし……僕達の世界では『魔法使い』という言葉にはもう一つの意がある」

その言葉にマルコが首をかしげると、蓮は続けるようにその答えを述べた。

「魔法の力をいつか手に入れる、生まれた時からそうと運命的に定められている人間さ」

魔法使いは、魔術師の天敵であると同時に道具ともみられているという事だ…

その力を手に入れる為に、多くの魔術師が何の罪のない人々の『意味』を改竄し、そして失敗していった…

そして今度は同僚にまで……ッ！！！！」

拳を握りしめる蓮もまた、そういった魔術師の実験の被害者だったのだろうか…

そう思うと蓮がたった一人で来てまで魔術師の野望を壊そうとする強い執念、そして今の彼には何もできないという腹立たしさがまるで自分にまで伝わってくるように、マルコは思えた。

「ごめん、少し冷静さを欠いてしまったな…ここからが本題なんだけれど…」

ハッと冷静さを取り戻して、蓮は再びマルコに向き合って提案した。

「晶水、魔法の使い方を教えてほしくはないか？」

蓮の言葉を聞いて、マルコはハッとしたように眼を見開いた。

下校時間の敗北、そして殆ど奇跡として得た生…今は迷っている時ではないと解っていたはずなのに

今なら気付ける、マルコはただ恐怖していたのだ。

寸前で避けたジュリアの凶刃、それが眼前を薙ぎ払った感覚、そして突きつけられた殺意…

しかしマルコはやめるわけにはいかない。

助けたいと思った黒い魔術師の少年と、白い魔術師の女の子が居るから…

「教えて、神賀戸くん…私に、魔法の正しい使い方を！！」

マルコの決心は、更に深く固まった。

話は、マルコが家に帰る直前に戻る。

「ああ、それでこそマルコ…マルクトの魔法使いよ、ね？」

遠く、電柱の上から眺める姿がある事にも気付かず、マルコは家に帰る。

見届けていたのは明だ、深刻な表情でマルコの姿を見つめた彼女はおもむろにコートのポケットから携帯電話を取り出す。

「ああもしもし、久しぶりねえ元気してたかしら…ね？」

明は懐かしいと元再開したかのように気さくに話しかけるが、その目は決して笑っていない。

明は誰よりも電話の先の男を憎み、また誰より電話の先の男を頼りにしているからだ。

『何の用かね？…ざっと2年ぶりか…』

「ジュリア・フリードリヒ・ヘンデル…確か、貴方が保護した子よね？」

そのジュリアって子が行方不明にでもなっているのなら、私の方から情報を提供してあげてもいいのだけれど…ね♪」

明がそう言つと、電話の先の男は一瞬とはいえ明らかに動揺したように『！？』と、驚愕を露わにした声をあげる。

「安心して、私が取って食ったわけじゃないからね♪」

でも、相手によってはもっとひどい事になっているかもしれないわねえ…？」

『…いるんだな、ジュリが…青銅欄、お前の楽園に!!!!』

Netzach：覚醒、飛行魔法と猫の視線

「はぁ…はぁ…く、うう…」

現代の日本において、人間の気配を感じない場所は殆ど無いといつても過言はないだろう。

しかしてこの場所は、あまりにも人間の気配というものはなく、代わりに少女の苦しむ咽び声のみが響いている。

「う…くぁ……………あああ！あ、うぐうう…っ！！？」

「やめろ…」

喘ぎ苦しむ少女、ジュリアの傍らに…黒い天使が立ち、見ていられずに目をそらし叫ぶ。

「やめろ…もう止めろ、00（アインソフ）う！！！！！！！」

しかしそれは少女ジュリアの苦しみを助長させるのみにしかとどまらない

臃気なな思考と、只一つの単語から溢れる感情の波の摩擦
それが苦痛となりジュリアを苦しめているのである。

「…中途半端に思考権を返した結果だ、お前の提案ではないか…」

あまりにその男の存在感は人間とはかけ離れていた、しかしそれは確実に人間で

しかし天使でさえ顔を背けるジュリアの現状を冷酷に見つめ、ただ其処に立っている。

「やめて…こんな気じゃなかった…だからジュリアを…助けてくれ…」

「…いいのかね？ここで思考権を私に返還するということは…またあの町の者をブランク化する為に意味を奪って廻ってもらうこととなるが…？」

黒い天使、メタトロンは俯いて翅を屈辱に震わせる。

もはやのたうつ体力も無くしたジュリを挟んで、メタトロンに向かい合うように立つその男は

悪趣味としか言いようがなかった。

しかし彼女達はその男に従うほか選択肢を持っていなかった。

——— こんな事なら、あの男の言う通り『あれ』の研究なんて辞めておけば…っ！———

悔し涙を流すメタトロンにさえ、魔術師は冷たく見下ろす。

そして魔術師は冷酷に、ジュリアから再び思考を奪おうと無感動に手を振り上げた。

ジュリア・F・ヘンデルの襲来から数週間が経ち、マルコは今日もまた朝早くから魔法の訓練に明け暮れていた。
あの事件以降、マルコもまた魔法をよく知りたいと思うようになった。

唯与えられた能力としてではなく、ブランクとジュリアを救う方法として魔法を使おうと努力し始めたのである。

「魔法というものは、要は権限だ

異相にある大いなる円環の操作を天使によって運命受けられた存在が魔法使いだ

だからこそ、マルコの想像することは創造することに等しくその想像を現実にする権限がある

つまり、自分の想像の幅を広げることがそのまま魔法使いとしての強さになる

……理解してるか？」

「は…半分くらい…」

「まあ、小学三年生だもの。

誰かさんみたいにずっとそのまんまなんちゃって名探偵じゃないんだから。」

エリヤの言葉に蓮は少しばかりむうと唸るが、気を取り直して説明を続ける。

非観測空間の結界によって、人間の侵入を防がれた公園の中

すでに変身を終えたマルコは蓮の講義を受けて頭から煙を吹き出しそうになっていた。

「王国は流れで構成される物質界を操る魔法

つまり『流れ』をテーマに想像すればいい、ちょうど何時ぞやの飛行魔法みたいなものだ」

「……………」

マルコは言われるままに、ドラウプニルの輪を目の前の木に向かって出現させる。

そして飛行した時と同じように風の流れをつかんで、一点に貯める。そして少しだけ風穴を開け、一気に放出した。

……ドゴン！！

……木に拳大の風穴が空き、ほんの少し
まるで世界がそれを理解することを遅れてしまっていたかのように
間をおいて、風穴のあいた木はバキバキと音を立てながら倒れた。

「……ええと、加減も考えようか」

「う、うん……！」

マルコがブランクの気配を感じて周囲を見廻す。

先日の襲撃以来、マルコに感覚の鋭さが増したような気がするのは
蓮の気のせいだろうか

「どうやら考えている暇は余りないようだな」

蓮はちらりとマルコの方を見やる。

こくりと頷くと、マルコは目をつぶってドラウプニルに意識を集中
させる。

——こうしている間にも、ジュリアちゃんも……あの子の天使も、
苦しんでる……きっと泣いてる……危ないことだっしてる

だから……そんな理不尽を止めて見せる、私の幻想で……^{イメージ}奇跡を起こし
て見せる……！

力を貸して、ドラウプニル……！——

「……王国の魔法よ、顕現せし王の奇跡よ

私はここに新たな則を唱える者、新たな理を添える者
故に私は望む……この手に奇跡を、^{まほう}闇を払う魔法を……！

フェオ・ウル・ウィン・アンスール……！」

マルコが唱えると、ドラウプニルは呼応するように黄金色の光でマ

ルコを包む。

それは、新しい形だった。

マルコの実に纏われるのは、皮の鎧のようなものに加え風を現すような流れるような羽衣と、無限に増え魔法を伝達する特性を持つドラウプニルの環

それらが組み合わさって、マルコの進化したイメージがその身を包んでいく。

エリヤは黄金の剣に変身してマルコの背中の鞘に収まった。

「…王国の魔法使い、これが私の奇跡…！！」
ちから

それは、前の服装よりも若干ヒラヒラしていて身軽さを想わせる衣裳だった。

そう、空を駆ける天女のように。

変身が終わると、マルコは地を蹴ってふわりと宙に浮き上がる。

「相変わらず発想は優秀だ、それで良いんだよマルコ」

魔法による装甲と王国の魔法マルクトを伝える無限のドラウプニルの環こそが、マルコの極的な装備である。

それにより風と結界を無駄なく操り、無駄な装置＝環を抜く事に成功したのである。

「それじゃあ、行ってきます！！」

轟！！という音と共にマルコは空高く飛んでいった。

「理論上は認識障害の魔法もできるか…」

残された蓮は軽くため息をつきながら、公園を見渡す。

「こつちも、いざという時の為に用心はしておくか」

一方で青銅欄上空を疾走するマルコの目には既に5つの白い影が映っていた。

「居たっ、あそこだ!!」

マルコが視認した先には、空間を白くくりぬいたようなブランクが五体

いずれも翼のようなものを生やし、それぞれが違うルーン文字を表面に刻み込まれている。

『またルーン付きのブランク、待ち伏せね。確実にマルコを潰そうとしてるわよ?』

「でも、やるしかないよ!」

マルコは空中で静止して天に手を掲げる。

「探して、ジュリアちゃんを!!」

マルコが叫ぶと掌の先にドラウプニルの環が出現し、またたく間に周囲一帯を覆う程広がっていく。

環に入った物体の形から存在を辿る、広範囲の探索魔法である。しかし探索範囲にはジュリアと思しき影も形もない。

「…今回は居ないみたい…?」

マルコが首を傾げると、エリヤがううむと唸る。

『ひよっとしたら……』

「どうしたのエリヤ？……ひゃあ！！？」

マルコがエリヤに考えを聞く前に、ブランクがマルコに接近して剛腕を振るう。

その腕は影もないため立体的に把握するのは難しいが、シルエットとして剣の形をしていた。

間一髪……しかし、前のような偶然の反射ではなく確固たる意志による回避。

マルコは正面を見据えて、ドラウプニルを付けた腕に意識を送る。

「勝てない相手じゃ、ない！！！」

ガチン！！という音と共に、剣のブランクに拘束具のような環が嵌められその身を拘束する。

続いてハンマーのような腕と蛇のような腕をしたブランクが襲いかるが

「エリヤ、ごめんね！！！」

『よいしょお！！！！』

マルコは即座にエリヤの剣を引き抜いて攻撃を同時に防ぐ。

『あたしは片割れにして最後の剣よ、この程度の攻撃耐えきってみせるわ！！！！』

ふんつと鼻息を荒くするような声がするが、剣である為それを判別するのは難しい。

「それから…やあぁーっ!!」

マルコは魔法使いとして底上げされた運動能力でエリヤを振るい、ブランクの腕のルーンを切り落とす。

ブランクの腕は切り離されず、ルーン文字のみが分離したのである。

「思った通り、この魔術はエリヤで切れる…でも、ごめんね」

少なからず痛みはあったのだろう、理性泣き雄たけびを上げながらブランクはルーンを切り落とされた腕を押さえ悶え苦しんでいる。

『マルコ、あと三体!!』

エリヤの言葉と共に、残り三体のブランクが陣形を組んで飛翔しマルコを取り囲む。

しかしマルコはその僅かな隙に、三方のブランクに向けドラウプニルの環を二重に向けていた。

片や空気の押し出し、片や空気流の阻害、そしてマルコは阻害の環の効果にごく小さい穴をあけた。

『エアー、バレット!!』

バシュ!!バシュ!!バシュ!!

と、ブランク達の頭部らしき部分に拳大で高圧の空気弾が炸裂する。

「エリヤ、今の何？」

『技名は叫んでこそでしょ？』

なまじ人間の姿を留めていたからだろう、急激に頭を揺さぶられた
ブランクたちはくらりと空中でよろめき

マルコはその隙を逃さなかった。

ガチン

五体のブランク達に、それぞれドラウプニルの環が固定して狙いを
定める。

「巡って、奇跡の世界！！」

マルコが魔法の名を付け呼んだ事に歓喜するように、ドラウプニル
を介して膨大な魔力が異相からこの世界に顕現する。

それは拘束されたブランクを貫いてから異相へと戻り、再び別の環
から顕現して痛みに苦しむ二体のブランクを貫きまた異相へ…

そして流れは三又に分かれ、三つの環から同時に放たれた魔力流が
残り三体のブランクを貫いた！！

ブランクは貫かれた衝撃に雄たけびを上げるが、そこに苦しみはな
いのは解る。

魔術師に意味をえぐり取られたその傷を、魔力が見る見るうちに癒
していくのである。

『フィニッシュー！！』

「やあああああああああああつ！！！！」

そしてマルコの剣が、サンダルフォンブランクの体を…否、魔術師の呪いを断ち切
った。

「…にゃあ…」

それを地上、ビルの屋上から観察する者が居た。

正確には『者』と言うより『猫』、漆黒の毛並みを持った猫である。その傍らには銀の毛並みを持った猫、しかしこちらには明らかに猫とはいえない特徴を兼ね備えていた。

羽である、銀の毛並みを破るように黒い羽を生やした猫が、黒猫の傍らでやはりマルコ達を眺めていた。

「何をしている王国の魔法使い…それは、魔力をただ集めさせるためだけの供給機、その一分隊に過ぎないのに…」

羽を生やした銀の猫は、いつぞや聞いたような声で喋る。

それは、メタトロンの声…その猫こそが、姿を変えたメタトン本人なのである…そして、傍らの黒猫もまた…。

「早く、早く私達の事に気付いてくれ…これ以上ジュリに、罪を負わせないでくれ…」

メタトロンは…天使は苦痛に満ちた表情をしながら俯き、空を駆ける魔法使いに願う。

それは、何よりその持った力によって人間とは違ったを歩まされ続け拳句は今この時、思考も何もかもを奪われたただ操り人形と化してしまった哀れな己の相棒を思つての事。

「早く来てくれ…ジュリを、倒せるところにまで…っ!」

天使のこぼした泪の音は、吹きすさぶ風の音に虚しくかき消された。

明は、開いた玄関に居るその存在感に微笑みかけた。

その男は何処から見てもごく普通の青年だった

しかしそれはその男が魔術師である事を隠すカモフラージュが非常に上手いというだけの事である。

彼を知るものならば、誰もがその巧みな魔術世界の渡り方を…隠匿されるべき世界の歩み方を褒め称える事だろう。

何故なら男は、明に次いで魔術世界の在り方を理解せざるを得ない…そんな人物なのだから。

「いらつしゃい…歓迎するわよ、現代最高位の魔術師さん…ね？」

男は…どこか外見に合わない教師じみた表情で、懐かしむように明の言葉に応えた。

「久しぶりかね、明」

Netzach：覚醒、飛行魔法と猫の視線（後書き）

異相（魔術世界全般）

この世界は単純に一つではない。

別次元の方向にずれた『もうひとつの世界』が重なって存在しており、そこにこの世界の物体が放出した魔力が流れ着くとされている。

あらゆる魔法が、あらゆる魔術が、あらゆる幻想存在が

この異相からこの世界に干渉して生み出されるのである。

Hod：予感、懇願と陰謀

ここは…どこだろう？……？

ふわふわして、ねむすぎて、考える事さえつらい

こんなとき、助けてくれる人が居た筈なのに

炎の中…崩れ落ちる教団の中で、確かに誓ってくれた筈なのに…

何処に居るの…？

あの人は…私は…何処に居るの………？

喫茶アヴァロンにて、明は客人にサンドイッチと紅茶の乗ったトレイを差し出した。

客人とは、果たして先週明が電話をかけた男、この男もまた魔術師である事に違いはなかった。

しかしそれにしては男の姿は普通すぎる、そう言えば蓮もまた普通といえば普通なのだが

この男は学生に見えたかと問われればそういう雰囲気も持たない、しかしてそれ以上に見えるかと問われればそうでもない

本当に平均的な年齢に整えられた外見の男なのだ、それで尚彼の外見を年齢として区別しようものなら

恐らくは17 20程のものだろうか。

唯一特徴といえばツンツン跳ねた髪型に二つ、獣の耳だか角だかのような髪の毛があるだけ

否、それこそが男を周囲より区別する唯一の記号だった。

それさえ目を閉じている今は唯一かさえわからない。

まず区別をさせないのだ、それこそこの男の魔術師としての力量を示していた。

「さて、何から話そうかしらねえ…とりあえずはあっち（イギリス）で食べたおいしい物のことでも聞こうかしらね？
うちのメニユーにするから…」

そんな魔術師に対する明の言葉はいたって日常的なものだった。
それ自体に思うところがあつたのか、それとも他の話をしたいのか
魔術師は眉毛をピクリと動かして明に問い返す。

「大学は大丈夫なのか、明…」

「あら、そんなのもう辞めちゃったわよ…世の中には小学生で会社
立ち上げたり、高校中退でその親会社の社長やるような
労働基準法ガン無視の奴らだっているし、ね？」

なにより、こつちのほうがあの子の情報を集めるのに都合がいい…
でしょう？」

明のあつけらかんとした応えに、魔術師の眉毛はまたピクリと動く。
情報の開示を許さないこの男の前でさえ明は不動であり、この魔術
師でさえ明の前では薄くとも反応せざるを得なかった。

唯でさえ、魔術師は明に聞きたいことが山ほどあるのに明は不動な
のである。

それは普段の明とは明らかにかけ離れていたのか、それともただ不
動なのか

何れにせよ、不動と不動の折り合う二人の関係においては先に不動
を解かざるを得なくなったのは魔術師であり
明はその不動を維持し続けているのである。

そこから魔術師は、明の目論見を読んだ…読んだ、つもりだった。

「…そうか…その子が……………」

明は急に不動産を解いて、悶えた。

「や、ほかにもちっちゃい子がたくさんね♪
つつい無料でおごっちゃうものだからたくさん来るのよ、ああん
小さい子バンザイ♪」

魔術師は今度こそ不動産を解いてカウンターに突っ伏した。

先に不動産を解いたのは明であるとはいえ、今度こそ降参である。
そう思った魔術師は再び座りなおした後、額に指を充てて唸った。

「お前は…暫く会わないうちに随分とHENTAIになったな」

ズバリと言う魔術師の言葉に、明は振り返って当たり前のように返した。

「あら、貴方も人のことは言えないんじゃない？たとえばそう…ジ
ユリアちゃんの事とか、ね♪」

その時魔術師は確信した、これがただの嫌がらせであるという事実
に。

いや、やつのことが付いたのだ。

通常であるのなかかる事のない簡単かつ稚拙な嫌がらせにはめる
事、それが明の目的であった。

それは、遠まわしに明がまだ自分の事を許していないという事なの
だろうと魔術師は確認した。

「……………やつとその話になったか」

「あら、そのために来たのならすぐ言ってくれなきゃ
あまりにもあの時と変わらないもんだから、唯の浮気かと思っちゃ

「たわよ？」

とぼける明に、嘗ての兄妹弟子でありながら彼女の最悪の敵である魔術師は

それでもそれまでの明をすべて知っていたかのような口調で言った。

「……違うな、明……お前が変わりすぎたんだ」

明は、心底あきれた瞳を魔術師に返した。

「あれ、明さん今日は大人のお客さんが来たの？」

こんな空気の中でアヴァロンの玄関口を開けて素っ頓狂な声をあげたのはマルコだった。

魔法の練習で付けたものだろう、土埃に汚れ……絆創膏が幾つか張られた体で

蓮と共に顔を出したマルコは、明の店に大人の客が普段立ち寄らない事を既に知っていた。

「あらあらあ、マルコちゃん……そんな泥だらけになっちゃって、『駄目』よお女の子は綺麗にしてなくちゃ」

明がそう言うと、マルコの衣服に付いていた土ぼこりが何事もなかったかのように消失していた。

まるではじめからそこにある事を否定されていたかのように。

「……！……そうか、反には覚醒していたんだっただな」

魔術師がそう言つと、その声を聞いて蓮は信じられないものを見るかのように目を見開いた。

「だ、団長！！！？何でこんな所に……！！！」

「おう、レイライン……半年振りだな？」

蓮の言葉に魔術師は軽く手を振つてかえす。

「ええつと……神賀戸くん、この人……神賀戸君の知り合い？」

話が見えず蓮に尋ねるマルコに、蓮は物申す事さえ恐れ多そうに恐る恐る口をひたいた。

「……薔薇十字騎士団団長、獣666……アンチウオーロック対魔法使い魔術師……メイガスこの前
言つたジュリアの婚約者で、僕の所属する組織の最高権利者だ」

蓮がそう言つと、魔術師はマルコを見やり微笑みかける。

「はじめまして、王国の魔法使い……クロウリー下院「K」無明だ。暫くの間は、
よろしくかね」

魔術師……下院の微笑みは、蓮やジュリアとは違ったイメージをマルコに与えた。

「ジュリが世話になつてしまっているようだがね
今は何処にいるかは解らない彼女に代わり、お詫びしよう」

そう言つて頭を垂れる下院に、マルコは慌ててかえす。

「い、いやあの……いいですそなの！」

あの子に狙われるような事をしてるのは私の方ですし、それにジュ

リアちゃんは…」

「魔術師に操られている…か」

マルコがいかけた処で、下院は真剣な眼差しでマルコを見る。

マルコは下院の瞳に込められた後悔の念に押されるように黙ってしまった。

「下院、そろそろ話してくれないかしらね？」

何故ここに貴方の婚約者が居るのか…魔術師に操られるのなら、それなりの望みや弱みがあったという事

それも婚約済の魔法使いがよ…ね？

今回の事、総て貴方に責任があるんじゃないかしら、ね？」

「・・・っ」

明の冷ややかな視線が下院を射抜く。

「め…明……さん？」

マルコは明から何時にない感覚を感じて後じさる…明のその様子は怒りも要求も感じさせない

ただ怒りもない凍りつくような憎しみ、それが下院に突き刺さっているのを感じてしまっているのである。

「…言わないなら…」

明の言葉に、その場に居る全員がごくりと息をのんだ。

「貴方が小学生の頃、給しよ…」「わああああああっ！！！！？？」

だあああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」……たことバラすわねえ!!!!!!」

明がカミングアウトしようとした事を、下院は我を忘れて大声でかき消した。

蓮とマルコは何が起こったのかとポカンと口をあけてその様子を見ている。

「ふっふっふ……私、昔下院と同じ家で修行していてねえ昔の下院の悪事は全て記憶しているわよん、ねえ」

最後の「ねえ」の時に、その笑顔を見た全員が先ほどとはまた違った悪寒を感じた。

そう、まるで母親に過去の黒歴史的な事を大人になってから思い出されるような生々しい現実味のある悪寒である。

こほん

そう咳払いしたのは下院だった。

「言うさ……恐らくこれはジュリを止められなかった俺の招いた事だそれに、恐らく彼女を元に戻す力ぎを握っているのはその子だろうしな……」

「……ふえ、私ですか!?!」

下院に目を向けられたマルコは、確かに彼女を助けようという決意はしていた。

しかし、下院程の人物に鍵と言わしめるほどの要素が自分にあるとは到底思えなかったが故に

マルコはビクリと背筋をこわばらせて下院の話に聞き入った。

「そうだな…まずは、ジュリアの事情について話そうかね…」

下院は全員に見えるようにアヴァロンの壁に沿うよう巨大な自動筆記の魔法陣を映し出す。

「すごい…」

マルコがそう思ったのは、それがただの自動筆記ではなく下院の記憶にある映像をコンピューターも使わずに映し出しているという事だった。

自動筆記は、魔術にある程度洗練されているものであれば映像や音声を送る事さえも可能なのである。

そして下院の自動筆記に映し出されたのは、まだ今の自分より幼い外見をしたジュリア…

彼女が、暗い教会のような建物の中玉座に座らされている場面だった。

「ジュリアは嘗て、讃美歌の聖人と呼ばれた魔法使い…ゲオルク」「F」ヘンドルの血を引いた魔法使い候補として

まだ物心つく前から…ウエルダ教団という魔術組織で信仰の対象と祭り上げられていた…

彼女は生まれた時から、魔法と魔術という非日常の世界に生きる事を余儀なくされた少女だったんだ

ジュリアの両親がいつ、どうなってしまったのかは知らない…しかし、娘を一人偶像崇拜の対象にしようという事に、親は賛成するはずもない…

彼女は組織の崇める『聖人』^{まほうつかい}であつても、それでさえ孤独だった」

映像の中…ジュリアの座らされた玉座の前には信者と思しき生氣を感じさせない集団と、幹部らしき男の姿があつた。

「そして俺の居た十字教薔薇十字騎士団は、非公式の魔術を弾圧し根絶するのが基本方針だった。

それも元来魔術とは神や聖人…魔法使い達の起こした軌跡をなぞり、神の定めた使命に反する事だからだ…という名目はあるが

実際のところ、薔薇十字騎士団の団員のほとんどは…この俺を含めても、魔術師をはじめとした超常を悪事に使う者への復讐のための組織だ

そんな薔薇十字騎士団と、ウェルダ教団が対立するのは必然ともいえる事だった

俺がジュリアと出会ったのはその頃…騎士団のウェルダ教団討伐の際に、行き場を失った彼女を俺が見つけてしまった」

「で、その時には婚約する程には一目惚れしちゃったみたいねえ…しばらく会わないうちにロリコンになったわけねえ」

明の言葉に「お前が言うな」と少しばかり眉をひそめる下院だが、フウと一息ついてその言葉を直ぐ肯定する。

「まあ…ジュリアに一目惚れしてしまったというのは本当だよ、だからこそ彼女を護ろうと思ったんだ

彼女には、魔法使いの素質もあつたしな…護ろうと思えば、一生をかけて護らなければならない」

「ジュリアちゃんは、その事を…？」

マルコの問いに、下院は応える。

「知っている…教祖にとどめを刺したのも彼女だ。そして、あの子は俺の事を許してくれた。親を早くに失い、育ててくれた組織も…

普通の人間としての未来も全て諦めたうえで

そして、その事さえも受け入れて俺の事を愛すると誓ってくれた。

俺達は永遠に愛し合う事を誓った仲となった…だからジュリアはあんなことをいつしか願うようになっていったんだ」

「あんな事…？」

下院は組んだ腕に額を乗せて言う。

「ウエルダ教団の魔術師たちが魔法使いまで手に入れて研究していた永遠の命題であり

彼女が生まれた時から、ウエルダ教団に刷り込まれた生来の願望に

近い目的…

リンカネーションリザレクション

転生術や蘇生術さえも超える死の超越…

メトセラレーション

不老不死の秘術…

しかしそれは、逆に十字教の教義に反するものだ

だから俺はジュリアに異端騎士の称号を預けて『異端魔術の研究と排除任務』を彼女に命じ世界を廻らせたんだ」

下院の言葉に、明は呆れたように言う。

「結局偽善の果てに失敗して正体不明の敵に渡してしまったと、とんだ大バカな話ねえ」

「っ！！明、貴様！！！！」

明の言葉に逆上した蓮を、下院が押さえる。

「ああ、また失敗したんだ…だからこそ、俺にも手伝わせてほしい魔法使い晶水搏子、君にも俺から独自に協力を要請したい…構わな

いかね？」

その頃、魔術師は舌打ちをしながら隠れ家である廃墟に足を踏み入れる。

その様子を見たメタトロンは魔術師に尋ねた。

「ジュリアとの仕事に問題はない筈だが、何かあったのか？」

「…どうやら私が君達を占有していた事が、姫様と騎士にばれたらしい…そろそろ、潮時だ」

魔術師のその言葉に、メタトロンは眉を潜め…その体を発光させた。次の瞬間には魔術師の胸ぐらは掴まれ、壁にその身をたたきつけられていた。

「ま、待て！！…がはっ！！？」

「私達を見捨てると言うのか、ここまでやっておいて！！」

もしもジュリを元に戻さないというのなら、今この場で殺してやつても私は構わないんだぞ！！？

例え墮天してしまってもな！！！」

魔術師の胸ぐらを掴み上げているのは凜とした印象の女性…その背中に生えた黒い翼から、彼女がメタトロンの変化した姿だということが解る。

「今度こそ、今度こそ仮契約などではなくジュリの『思考』を返してもらおう！！」

その為に手伝ってやったという事を忘れたわけじゃないだろう！！
」

「お前は勘違いをしているようだ
私は契約は守ると言った…ただその方法としてジュリアに処置を施したまでの事」

「……………っ！！貴様アッ……！！！！」

魔術師の言葉に、メタトロンは怒りを露わにして睨みつける。

「私にのみそれが可能なのだという事を忘れてもらっては困る、商談にすらならないからな

もうキミは知っているだろう、私の能力…無限であり無双、決して相似はなく唯一無地のモノ

故に私にのみ可能なのだ…思考の返却も、不老不死の秘術も
魔術師から00の魔法使いへ至った…この私にのみなあ」

魔術師は痩せ細った初老の顔には似合わない、獣のような笑みをメタトロンに向ける。

「……………っ！！」

「敵の魔法使い、確か小学生だったそうではないか
全く…出し抜こうとした上にそんな相手にてこずっている事さえ知れたら今度こそ私は終わりだ。

当然、私に主人の思考ルーンを握られているお前とお前の主人もな
そうだ、次の意味を集める襲撃箇所は…ここだ」

魔術師は、机に広げられた地図のある一点を指してまた獣の笑みを

浮かべる。

メタトロンは、その先を見て絶句した。

「まさか、ここは…青銅欄第三小学校…」

「子供の持つ意味は多くの可能性と魔力を秘めている、最後の仕事にここは打ってつけだろう？」

魔術師の醜惡な言葉に、メタトロンは拳を握りしめる。
しかし…

「この仕事が終われば、晴れてジュリアの思考を完全開放しようというのだ…不老不死の秘術もなあ、悪い話じゃないだろう？」

「っ！…！」

今度は魔術師が、メタトロンの顎を掴み強制的にグイッと己の顔に寄せる。

「それまではまだ貴様らは、このグラディ＝マクマートリーの所有物だという事を忘れるな…」

…ツクツハツハ、ハアーツハツハツハツハツハア…！！」

廃墟に魔術師の高笑いが響く

決戦の時は、刻一刻と近づいていた。

I esod：臨戦、魔術師と魔法使い

果たしてこの因縁はいつから続くものなのだろう…

俺にとつてもそれは明と出会ったその時からと自覚してはいるがそれは積み重なった観測の結果として俺が彼女を原点として置いてるにすぎない

恐らく彼女は、俺に出会う事なく魔法に出会い然るべくして魔法を手に行っていたに違いない。

そのまま破滅の道を選ぶか、それとも俺と言う憎しみの矛先を作ったことで救われるものもあったのか

俺の主観からは何も言えない。

たとえどれだけ高位の称号を得ようが、魔術を会得しようが観測された現在の先には、ただ未来があるのみ。
ならば俺は…

「……………！！この感じ、それに…この方向は！！」

「学校…いや、公園か！！」

マルコと蓮がブランクの気配を察知して立ち上がったのは同時だった。

それと同時に、壁に浮かんだ下院の自動筆記の発行色が浸食されるように黒く変わっていく。

画面に映し出されているその姿は…

「ジュリ！！」
「お姉ちゃん！！」
「…それと、貴方が黒幕かしら、ねえ？」

その瞳に光を映さぬ銀の髪の少女と、敵意の視線をマルコ達に向けて黒い天使…エリヤの姉、メタトロン

そして…今にも折れてしまいそうな細い身を司祭のような霊装で身を覆い尽くした初老の男。

『これはこれは、よもや薔薇十字騎士団現団長様もお越しとはいささか御持て成しが少なかつたでしうかなあ…』

自動筆記の魔法陣の向こうで、男は獣のような笑みを浮かべる。その聞き覚えのある声を聞き、下院は初老の男…魔術師を見やる。

「お前は…」

『そうです、貴方に嘗てその地位を追われ…こんな辺境の猿山で隠居する事となった哀れな先達に御座います』

魔術師は道化のように外套を翻しそう言つと、再び獣の笑みを下院に向ける。

一方で下院はその男の目的を大方悟り、敵意の視線を見せる。

「ジユリを返してもらおうかね…」

『おお怖い怖い、若僧とは言え流石は現団長様。その子娘とは殺気がまるで違う、いやはやお見事なものです』

しかして私もこの様に便利な肉道具は早々手放すわけにはいきませんなあ』

魔術師は霊装と手袋で覆い尽くした両腕でジユリアを抱き上げ、その頬を撫でまわす。

無抵抗に撫でまわされるジュリアの頬は、ぐにぐにと形を崩しては元の無表情に戻る。

「ジュリアちゃんに…ジュリアちゃんに何をしたんですか!」

その光景を見て拳を握りしめ、我慢できずに叫んだのはマルコだった。

マルコはジュリアの元の姿を知らない、しかし、力任せに頬の形を変えられて表情さえ変わらないその姿はどう見ても異常だった。

それに、マルコの知っている分ジュリアは婚約者の事を思い出しても苦しむような程

下院の事も忘れていなかった筈だ…事態は、あの襲撃から更に酷くなっていたのだ。

『ブランクと同じですよ日本人のお嬢ちゃん、『思考する意味^{ルイン}』を奪い

何も考えられない、婚約の事さえ忘れてしまっているでしょう…なので私が使って差し上げているのですよ…ヒッヒッヒ』

マルコは吐き気を催す魔術師の笑みに戦慄する、この男は魔術師でも…下院や蓮とは全く違う

その魔術師はあまりに残酷で、傲慢で、なにより無限ともいえる欲望にまみれていた。

『さて、ここが何処か解りますか?』

魔術師が身をひるがえすとその後ろにはマルコにとって見慣れた光景があった。

「そこは…まさか、学校!」

『やはり貴女の学校でしたか…明日の正午、この学校に展開した非観測空間にて待ちましょう』

今は休みたいですからねえ、しかし…もし来ていただけなかった場合は、この学校の生徒全員をブランクに変えて差し上げましょう』

魔術師の言葉に、マルコは目を見開いて嫌な汗を流す。

（この人、どうかしちゃってる…ッ！！！！）

「お姉ちゃん…」

エリヤがそう言うと、メタトロンは辛そうにそっぽを向き、口を開く。

『私はジュリの守護天使だ、この男がジュリの思考も主導権も握っている以上手出しはできない』

そう告げるメタトロンの肩…羽の付け根も屈辱に震えていた。

『返答は、明日聞きましょうか…それでは皆様、良き週末を』

魔術師がそう言うと、壁に展開された黒い自動筆記の魔法陣はかき消されるように消えて行った。

「ジュリア……」

下院はカウンターに固く握った拳を押し付けて俯く…

「店壊さないでね？」

…成程、あの子はもうあの魔術師にとって用済みと言ったところなのかしらね

でなければこんな大雑把に果たし状なんて送るわけがない…悪趣味にして蒙昧、故に助かつてるようなものかしらね」

明が感想を載せると、マルコは下院のハーフコートを握る。
その表情は背の高い下院には見えなかった。

「マルコちゃん…」

「協力します、ジュリアちゃんも…メタトロンさんも、助け出します！だから…」

マルコは、怒りも含めた…それでも真っ直ぐと『助けたい』という信念のもとに
下院にその目を向けた。

「私達は何をすればいいのか、教えて下さい！」

翌日…青銅欄第三小学校にて

「あれ、今日晶水は休みか？」

太一はカバンを置いて教室を見回している。

「蓮くんもいないねえ…これはひよつとしたら、二人で一緒にずる休みかねい？」

「な、な、な、なんだってえ！！？」

太一はバン！！と、机に手をたたきつけて美香を向く。

「冗談だよ、きつと今日は用事でもあったんだよ

だから、今日はゆっくりマルコの好きにさせてあげた方がいいよ」

「なんだよ、美香は晶水が何してんのか知ってんの？」

太一の言葉に、美香は首を横に振る。

「知らないさね、でも…この前電話で話したマルコ、なんか悲しそうだったから

何やってたかわからんけども、嘘つきの優しいマルコは苦手だから…だからさ、今はあの子の好きにさせてあげて…またあとで事情を聴いてもいいんじゃないかねい」

美香が笑いながら言うのと、太一は黙って席に座り腕を組む。

「あのピンゾコもか…まったく、今日くらいは赦してやるかでも、俺からマルコをとったら容赦はしねえかな。」

良くマルコと蓮を知る実行委員の二人は、どうやって二人のずる休みを説明するか暗黙の了解で考え始めていた。

その様子を、常人には視えない非観測空間から覗くマルコは…

「美香…太一君…ありがとう」

と言って、決戦の舞台へ足を運ぶ。

「でも、太一君のマルコって何の事だろう…?」

相変わらず天然だった。

屋上にて正午、そこに居る人間は下院だけだった。

その目の前には不吉な目の輝きをした黒い猫…やがてその形は影絵のように変わり肥大化し…やがて黒い翼になった黒猫だったものはその内から銀髪の少女の姿を露わした。

「ジュリ…いや、憑いているかね？」

お前も騎士団を行きなりぬけたかと思えば、しばらく会わないうちに悪趣味になったものだ」

「騎士団に居たのも今こうしているのも、全ては私の欲望を満たす為その為に無限の魔法まで身に付けた、貴様ごときにはもう負けることなどない、騎士団ももう必要ないのだよ」

少女、ジュリアはたしかに口を動かして発音していた。しかし、その声は初老の男性…先日の魔術師のものだった。

「薔薇十字騎士団元団長…グラディ…マクマートリー
まさかこの数年の間に魔法まで手に入れていたとは…まずはおめでとうと言っべきかね？」

「っ…!!メタトロン…!!」……」

ジュリア…グラディが手を翻すと、メタトロンが飛来してカーテナ型の銀の剣となり
その手に収まった。

>i6283<ruby><rb>518<

「威光</rb><rp>(</rp><rt>ケテル</rt>
><rp>)</rp></ruby>と無限、アイソフ二つの魔法を前に
してその余裕、流石は対魔法使い魔術師といったところか！」

ジュリアの顔のまま、グラディは獣の笑みを浮かべ下院に切りかかる。

ギャリツ！と、金属同士が擦れる不快な音と共に下院は一步ジュリア＝グラディに踏み込む。

下院の手には何も握られていない、斬撃を受け止めたのは中空に浮く装飾過多の剣

「っ！！ブルンツヴィークの『守護の剣』か！」

「正解だ、流石は元団長といったところか…シャルルマーニユの知識は十分かね？」

下院はそう言うと、足元に置いた鞘をけり上げてその蓋を開ける。
ジュリア＝グラディは鞘を避けようと距離を取るが、それさえ下院は赦さない。

「行け」

その声とともに、鞘から二本の蛮刀が飛び、ジュリア＝グラディの退路を断つように後ろに回る。

「くっ！！」と、ジュリア＝グラディはその場で制止、条件をクリアしてまた一步下院は歩み寄る。

「まあ逃げるなよ…シュチエルビエツ、退路を断て」

次に下院は鞘から二本の剣を取り出し、空中に放り投げる。
剣はすいこまれるように屋上の四隅につきささり、二人を包む長方形の結界を作り出す。

「くっ…！一人でこの私を相手にするつもりか…！？」

「そうだ、と言ったらどうする？」

下院の言葉に、ジュリア「グラディは恐怖する。

「人の軀にこそこ隠れて、自慢するのみ。お前が俺に負けた原因はそれだ、お前は昔から臆病が過ぎる
もう少し本気を出してみたらどうかね？」

下院は嗤った…グラディの獣の笑みと違い、怯える獲物を前にした狩人の笑みだ。

グラディの笑みが上層を前にした野心の笑みなら、下院のそれは圧倒的な強者の笑みなのである。

「異教を狩れ、ティソナ！！コッラーダ！！」

下院が雄たけびと共に二本の蛮刀が回転しながら戻ってくる。
しかし…

「舐めるな魔術師があ…！！！！」

ジュリア「グラディは全身か魔力の威光を放ち、そこから針千本のように剣として物質化させる。

魔力の光の色は、以前のジュリアとは違った漆黒の光…否、これは

寧ろ無限の闇とも言える魔力である。

そして下院の放った蛮刀を弾いた後に、即座に魔力の闇に変換する。そして闇は収束して新たな形を取った。

「雷雲か、ブルンツヴィーク！」

「受けよ、創造の魔法！！ブラッディ・サンダー！！」

ジュリア「グラディの放った黒色の雷撃は、即座に下院の前方に立ちふさがった守護の剣にすいこまれていく。

しかしその衝撃は屋上に響き、非観測空間であるにも拘らずその床に深いひびを作っている。

「く…これがジュリの魔法か…」

それで尚一步迫る下院の言葉に、ジュリア「グラディは憎しみで顔をゆがめる。

グラディの魔法と、下院は認めてなどいないのだ。

「私が持つ無限の魔力、無双の物という特性、その末にある我が魔法だ！」

ジュリア「グラディの発する闇が、触手のようにメタトロンの剣に絡まっていく。

『……っ！…っ、あぁっ！？』

メタトロンは闇がその身を浸食する不快感に耐えきることができず悲鳴を上げる。

「浸食せよ我が闇、カオス・ブレイド」

それでも下院は一步踏み込み、手に持たないまま守護の剣を正位置に構える。

ガギイイツ！！と、不快な音を発して二つの刃が交錯する。

「ぐっ… おおっ！」

その衝撃に下院は膝をついて防御に専念する。

「ハハハハッ！！バカかお前は！！」

小娘の軀とはいえ近接戦闘型の魔法使いと体力勝負で敵うと思ったか！？

その上守護の剣も所詮正確な贋作、出来栄えは見事だが私に敵う筈がないだろうが！！

ホウラホラホラ！！今にも壊れるぞ！！！！！！」

ジュリア「グラディは闇に浸食されたメタトロンをでたらめに下院の守護の剣に打ちつけていく。

「ぐあ… あああ！！」

下院は魔力を守護の剣に注ぎ強化するが、その努力もむなしく…

「碎ける、人智の存在よ！！！！！！」

闇が、守護の剣を打ち碎いた。

笑みを浮かべたのは、下院だった。

「かかったな？」

「……………!!!!!!」

ジュリア「グレイが気付いた時にはもう遅かった。

下院はポケットに手を入れていた。

気付かなかったのだ、魔力を注いでいたのが…守護の剣ではなく、己のポケットだと言う事に。

「Wie f?r Eisen, wie f?r der Ma
?stab, Eisen, wie f?r die R?ck
emark, Eisen, wie f?r der Kno
chen, Eisen, es ist ein Kinn
Die Phantasie legt einen Drach
en des Eisens f?r Vermittlung
in der Wirklichkeit, meine mag
ische Macht und die Wirkliche
it hier

（鉄は鱗、鉄は背髄、鉄は骨、鉄は顎、幻想は現実、我が魔力と幻
実を媒介に、ここに鉄の竜を呼ぶ）

高速かつ正確に呪文を唱えながら、下院は大ぶりにポケットからそ

れを取り出す。

それは、ごく普通のキーチェーンだった。

しかしそれは下院の魔力を受けて薄く輝いていた。

キーチェーンだったそれは、いつの間にかその全貌を変化させていた。

長く、太く、そして蛇のように蠢き…魔術師が望む姿へと変貌する。

「来たれ鉄竜!!! Herensugue!!!!!!」(エレンスゲ)

下院が呪文を完成させると、それはキーチェーンではなく

鉄と鎖で構成された8つ首の龍とあらゆるものが認識した。

ケイオス魔術、己のイメージした幻想を現実へと呼びだす魔法に最も近い魔術。

下院の得意とする召喚魔術は、己の幻想を物体に上書きしてキーチェーンを鉄の龍のイメージで上書きしたのである。

「あ……あ………っ!？」

魔術の真髄を目の前にして、ジュリア「グラディは呆然と立ち尽くした。

鋼鉄の洗濯ばさみのような頭についた無機質な空洞の瞳に見つめられたグラディは、蛇に睨まれた蛙のように逃げる事すらできずただその恐怖に凝り固まった。

「懺悔は済んだろう?」

ヘレンスゲだけではない、下院もまたジュリアを見据えていた。

「さあ、行け」

下院がそう告げると、ヘレンスゲはチャラチャラと音を立ててジュリア＝グラディの体へと殺到し
その四肢を拘束して締め上げていく。

「ぐっ…「ああああああああつ！！？」」

グラディはこの軀に完全に取り憑いているわけではないようだ。
しかし、その体本来の持ち主であるジュリアは耐えられず、本来の
声でジュリアは悲鳴を上げる。

「すまない、ジュリ…耐えてくれ…っ」

そういいながら下院は苦悶の表情でヘレンスゲに魔力を与え続け、
拘束力を高めていく。
肉体の苦痛によって、ジュリアは本能的に体内にとり憑いた異物を
排除するまで…

「「や…あああああつ！！！」…ぐ、く、ははははははははっ！！！」
流星は薔薇十字騎士団団長、冷酷にして冷徹な判断だ感服するよ！！
しかしそれなら純粹に苦痛を与えるのみの魔術でも使えば良い
その僅かな甘さと、私を見くびった事が貴様の敗因だ！！！」

再びグラディの声でそう笑い飛ばしたジュリア＝グラディの身体が
ら、再び闇が染み出して行く。

「ヘレンスゲ、バスクのドラゴンだな？
ドラゴンは常に神の『敵』であり、それが故に弱点が必ず存在する。
マイナーなところを選んだようだが私には通じない、ヘレンスゲが
嫌う物…それは……

はっはぁン、『黄身のない鶏卵』だったなあア!!?」

染み出した闇は形をとって白い物体へと変色する、卵だ…それも尋常な数ではない。

完全に形成するまで空中で静止していたそれは、闇が総てそれに変換されると

重力に従ってヘレンスゲに縛られたジュリア「グラディ」に向かって落下していった。

パキャツ と、音を立てて割れた卵には卵黄がなかった。

その白身がヘレンスゲの胴体に触れた瞬間、ジュウウウウウウウウウウという音とともに鎖が腐食されていく。

「……くっ」

「ヒヤヒヤヒヤ!!そらそらあ!!!!」

早く何とかしないと奥の手がどんどん溶けていっちゃうよあ!!!」?

ジュリア「グラディ」はどんどん闇を染み出させ、自身に降り注いだ白身も闇に変換し

尽きることなく卵へと変換し降り注がせる。

「ああ、もう……十分だ」

下院の言葉に、ジュリア「グラディ」は完全に意表を突かれた。

そして新たに何かの存在感を察知するとそちらに振り返ろうとするが、まだ溶けていないヘレンスゲにそれさえも妨害される。

「僕達の勝ちだよ」

そしてジュリア「グラディ」の背中に、魔法陣の書かれた手袋が当て

「魔術師、レイライン」エドワード「ウェイトの名において汝に仮初の意味を与える!!」

下院の手によって新たに一回分だけ魔力を補充された霊装である手袋から

「あ……あ……が、ぐ……」

…そして…下院は力の限り叫んだ。

深い、深い……ジュリア「グラディの闇色の瞳の底
力を奪われ意識の奥底に縛りつけられた少女の耳に、その声は……
届いた。

少女、ジュリア^{II} F^{II} ヘンデルは、瞳をあけて婚約者の名を呼んだ。

I e s o d : 臨戦、魔術師と魔法使い（後書き）

威光（魔法）

第一セフィラ、王冠Ⅱ威光の名を冠する魔法。

物質の創造を司り、守護天使にメタトロンを持つ。

また、魔術的に00と繋がる性質がある。
アインソフ

00（魔法）

魔術から辿りつける数少ない魔法の一つ。

自己の存在根底そのものを書き変えて、自らを他者と確実に違うもののⅡ無双のモノにする事が出来る。

また、分身を作り無限の魔力を行使できるため

後方支援や潜行行動に異常な程まで特化した魔法である。

ヘレンスゲ召喚（魔術：ケイオス学派）

下院の奥の手。

自分の精神世界から幻想を取り出し現実世界の物体とイメージを重ねる事によって

一時的に現実中存在する物体を幻想上の存在に変換できる。

現存する魔術の中で最も魔法に近い魔術とされているが、魔法と認定されないのは

あくまで起点に自身で生成した魔力オドを使用しているからである。

特に召喚魔術は召喚に成功すれば後は魔力をほとんど必要としない為魔力の絶対量で差があり、魔術師の天敵に等しい魔法使いにさえ対抗できる。

故にこの系統の魔術を極めている下院は対魔法使い魔術師、獣66
6と呼ばれているのである

Malchut：奇跡、心の戦いと彼女の戦い

魔法に出会ったのは偶然だったんだろうか…

それとも誰かが仕組んだ必然だったんだろうか…

そんな事を考えるようになった。

でも今はそんな事はどうでもいい

強いて言うなら私はこの奇跡をくれた明さんに感謝している。

こんな助けられてばかりの私でも、誰かを助ける事が出来るようになった。

だから私は魔法をこんな事に使う。

ある人は自分の欲望のために、ある人は復讐のために
またある人は純粋な願いの為に魔法を使うんだろう。

私は、誰かを助けるために…この魔法を使います。

I n s i d e

深い深い闇の底、輝く柔らかい地面の上にて…少女は闇より伸びる
同じく闇色の荊に拘束されていた。

「ここは…何処だろう？あれ…ジュリアは、何してたんだっけ…？」

縛られた状態のままで少女…ジュリア「F」ヘンデルは首をかしげる。

「とりあえず…」と、ジュリアはその腕から眩い魔力の光を発する。
光は集束して果物ナイフのような刃物へと変わり、ふわりと宙を舞いその身を拘束する闇の荊を切り離す。

「よいしょ、にゃ…にゃはは、これ下院様が見たらびっくりするだ
ろっなあ」

ジュリアがこの能力に目覚めたのはつい最近の事だった。
メトセラレション
ある魔法を求めて旅するうちに、下院の先輩であると名乗る男に誘われ

この街：青銅欄にやってきてすぐに、ジュリアはその身に魔法を授かる事に成功した。

メタトロンも、それまでも彼女の心の中のみで繋がっていたが
実体化した彼女を抱き上げた時の感触良さは、（本人は喜んでいなかったが）早く愛する婚約者に抱きつかせてあげたいくらいだ。

「そうだ…そう言えば、エノクは…？エノクう？エノク…？」

ジュリアは慌てて周囲を探るが、誰も何も返さない。

「無駄だ、仮初の思考力を手に入れたとはいえ…お前にこの体の主導権などない」

「！……貴方は、グラディ？……ツア！！ あ、あああッ！？」

ジュリアは声のした方を振り返り、その存在を確認する。

その顔を見た途端に、鋭い悪寒が全身を貫きひざまづいたジュリアは全てを思い出した。

『死の超越ねえ…不老不死の方法なら私も丁度研究していたところだ
キミが手伝ってくれるのなら、私もキミに協力しよう』

『本当…！？ありがとですにゃっ』魔法使いにしてくれたお礼もきつとしますにゃ…』

『アレ…グラディ、急に…眠く……っグラディ、何をするの…っあ

あ！！？」

グラディの腕が自分の存在そんざいの奥深くに、深々と手を突き入れる
おぞましくも不気味な感触がリフレインする。

『なあと、貴女には私の思い通りに動く肉人形になって欲しいので
すよ…威光魔法なんて解りやすい戦闘系魔法も早々手には入りませ
んしね

安心して下さい、貴女の望みはかなえてあげます…この私の従順な
奴隷として永遠の生を約束しましょう…！！！！

く、は、は…ハアハハハハハハハハ！！！！！！！！！！』

「あ…くっ…グラディ、貴方は…ジュリアを裏切って…っ！！」

「ヒツヒツヒ…騙されやすい魔法使いも居たものだ、おかげで現団
長に復讐の機会もできたしなあ…」

グラディの獣の笑みに戦慄しながらも、ジュリアはキッとグラディ
を睨みかえす。

「しかし、今起きられては邪魔なのだよ

もう少し寝ていて貰わなければな、何も心配はいらない

此処はキミの深層心理の奥深く、此処で寝ていても誰も文句は言わ
ないさ」

グラディがそう言って手を翻すと、ジュリアに強烈な眠気が襲って
きた。

「んっ…う…っ…！！」

もう寝たりしない、外で呼んでる人が居るから…」

そう言つてジュリアは手元に威光の光を輝かせて剣を創り出す。

「残念だ、ならば最後のキミの理性…此处で殺して
本当に私のみに従順な肉の奴隷となつてもらおう　かつ!!」

グラディが獣の笑みを更に明るみにすると、周囲の闇から雨のように刀剣が降り注いだ。

ジュリアは即座に威光を放ち十本以上の剣で傘を作りそれを回避する。

「にゃ!?! ツ!! つ!!… そんな、これつて…威光の魔法!?!」

「私は無限魔法の能力を使って君に近い者として適正書き換え済み
なのだよ

そんな私に君の魔法が使えないなんて事はないだろう?…まして此
処は君のナカなのだからなあ!!」

グラディは腕を翻すと雨の様に放った剣を再び手元に集中させる。
そして巨大な腕のように無数の剣を配置させてジュリアを押しつぶ
さんと腕とともに振り下ろした。

ジュリアも負けじと威光を放ちサーベルレインで押し返そうとする
が…

ギギギッ…と嫌な音を立ててその場に押しと止めるのが精一杯とな
る。

「……………下院さまっ…!!」

精神世界とはいえ、仮初めの意味でのみ力を得ているジュリアには
これを押し返す程の力はない
あわやジュリアが観念して目をつぶったその刹那、何処からか飛来

した黄金の閃光が
グラディの凶刃腕を吹き飛ばした。

「これは…？」

ジュリアは目を見開いてその閃光の出所を見る。

その先…外では、まだ戦いは続いていた。

Out | side |

グシャリ…と、ヘレンスゲの八つ首が腐り落ちる音とともに
ジュリア…否、ジュリア…グラディは解放された。

「「あ…う、ぐ」」

しかしジュリア…グラディはジュリアともグラディともつかない混沌としたうめき声をあげてその場に立ち尽くしていた。

「やった…と思うのは早いかな…」

蓮がその学ランにかけた非観測結界を解こうとするが、下院に止められる。

「待て、今のお前にはもう戦うだけの魔力は残っていないだろう？
それに、これでまだ駄目ならやはり…」

下院がそっぴいかけた瞬間

「う…あああああああああああああつ！！」

ジュリア「グラディは悲鳴ともとれる雄叫びを上げて全身から闇と威光を噴出した。

「やっぱりマルコのように意味を完全再生させないと駄目かつ！！」

下院はそう言つて屋上の四隅に刺した霊剣を宙に浮かせ、手元に飛来させる。

「結界、不倶戴天陀^{ふくたいてんだかつ}喝！！」

下院は即座に術式を洋式魔術から仏式に切り替えて防御結界を張る。ゴバ！！！！という音とともに純粋な魔力竜が二人を襲うが、結界に阻まれてその内に穴が開く。

「ぐうつ！！！！これでは二人分持たないか…っ！！！！」

下院は結界を絞り、戦闘も防御も不可能である蓮に対して結界を強化する。

結果、弱まった下院の眼前に張られた結界はガラスのような音を立てて破壊される。

「ぐあああああああつ！！！！」

下院はジュリアの魔力流に吹き飛ばされ、屋上から放りだされる。重力に従つてそのまま下院は地面へと落下するが…

「くっ、シルフィード！！」

下院が唱えると、その身に羽織ったハーフコートに複雑な魔法陣が浮かび輝く

すると下院のハーフコートがはじけ飛び、あわや地面にその身が激突する直前に突風が下院を押し上げた。

「くっ…!!」

下院が屋上を見上げると、ロケットのような勢いでジュリア「グレイ」が青銅欄上空に躍り出る。

「まずいぞ…このままだと、非観測空間を飛び出してしまう!!」

しかし蓮はジュリア「グレイ」の飛び去った方角を見て不敵に笑った。

「大丈夫…あとは、彼女がなんとかしてくれる!!」

蓮の視線の先には…蓮とマルコが魔法の練習に使った公園があった。

「いける？マルコ…」

「大丈夫、私とエリヤなら…」

公園の中央にたたずむマルコは、左手を掲げてドラウプニルを起動させる。

プレスレットの姿から見事な装飾を持った腕輪へと形を変えたドラ

ウプニルは

主の名を待つように黄金色の極光を放つ。

「…王国の魔法よ、顕現せし王の奇跡よ私はここに新たな則を唱える者、新たな理を添える者
故に私は望む…この手に奇跡を、闇を払う魔法を！！
フェオ・ウル・ウィン・アンスール！！」

マルコの声とともに、ドラウプニルは魔力の光を放ちマルコを黄金の光で包んだ。

もと着ていた服は大気に溶けるように消え去り、代わりに黄金の輪と強靱かつ軽い羽衣のような魔法の力がマルコの身に纏われていく
パン！ と、やがて黄金の光が弾けるように散った時

その内から王国の魔法使いマルコが姿を現した。

そして丁度その時、マルコとエリヤの上空をジュリア「グラディが通り過ぎようとする。

『マルコ！！』

「力を流すよ、奇跡の世界！！」

マルコが魔法の名を唱えながら、黄金の剣に変身したエリヤを地面に向ける。

剣を深く地中に突き刺し、その周りをドラウプニルの輪と蓮の張った魔術トラップの放つ光が囲む。

マルコがエリヤとドラウプニルから流した大魔力は、公園に張り巡らされた蓮の魔術刻印を次々と発動させていく。

そして公園の周囲を正八角形が包み、その上空のジュリア「グラディをも結界がとらえた！！

I n | s i d e |

ジュリアは闇を裂いて降り注ぐ黄金の光に照らされ、溢れる力に困惑した。

「これは…？この光、力があふれてくる…！」

「チツ、外で魔力の供給だと？…あの魔法使いの子娘か…！」

そう言つてグラディが背後を振り返ると、立体映像のように数分前からの映像が闇の中に浮かび上がる。

下院との屋上での決闘直後…仮初の意味を撃ちこまれてからの映像が…

「下院様…！！」

ジュリアは確かに、その映像の中に自らの魔力に飛ばされた下院を見て目を見開く。

そして溢れる力の限りその拳を握りしめ、その内に威光の光を押し込める。

「助けに、来てくれたんだ…ジュリアを…」

ジュリアは、孤独な少女だった。

物心ついた頃から教団で育てられ、生きた魔法具として信仰の対象となっていた自分は

人間ではない、丁度今のような肉の人形として生きてきた。

教団が崩れ落ち、燃え盛る炎の中下院に出会い…そして護ってもらうために婚約した。

しかし何時からかジュリアは下院の事を愛するようになっていた、それに下院が気付いていたかはわからない

しかし、ジュリアはここから生まれて初めて願いと言える願いを持った

いつまでも下院と共に居たい…その願いは、自分の為だけのものだというのに…。

『ぐあああああぁあつ!!』『……………っ!!』

突然聞こえた下院の声に、立体映像へと目を向ける。

下院は光と闇の魔力に押し出され、屋上から地面へと落下していった…。

「や…いや、下院さまあつ!!」

ジュリアは涙を流しその立体映像へと駆け寄るが、グラディの放つ剣が足元の地面に突き刺さり足止めされる。

「ああ、なんという事だ…こんなにあつけないものだったとは…嘗て薔薇十字騎士団団長の任を追われた復讐は、こんなことでは澄ましたくなかった筈なのになぁア」

そう言つて立体映像を消して振り返るグラディの顔には明らかな憤怒が浮かんでいた。

「我が復讐は、こんな事では済ましたくなどなかった

お前もそうだろう、嘗てお前の…育ての親であるウエルダ「エアリアルマスター」を殺し…

お前の居場所を奪つた下院への恨みは、そんなものでは済む筈はないだろうが!!」

地面をダンダンと踏み付けてグラディはその理不尽な怒りをこの世界に、ジュリアにぶつける。

しかしジュリアはそんなグラディの言葉を聞き、その表情から心を

消していく…

「何を勘違いしてるの…?」「……………何?」

静かに、そして確かな怒りを込めてジュリアは言った。

その次の瞬間 バチイッ!!!! と、極大の電光がグラディを襲った。

「ぐおおおっ!!!! があっ!!!!?」

電撃…否、雷撃の衝撃にグラディは片膝をついてそのダメージに耐える。

「馬鹿な…主導権を持ったこの私に貴様の攻撃が通じると…???
あり得ん、ありえん!!!!!!」

グラディは駄々をこねるように叫びながら、突き出した手のひらから極大の闇を生み出し
無限ともいえる数の剣をジュリアに放つ。

「ブラッディ・サンダー」

ジュリアがそう呟くと、掌に圧縮された魔力の雷雲が無限の剣を伝いグラディに襲いかかる

「がああああっ!!!」

何故だ、何が違うというのだ…私とお前、共に野望を持ち

復讐すべき敵を持つ…なのに何故、何故なのだジュリア!! フリード

リヒ「ヘンデル！！！！！！！！」

「私は愛したから」

頬に涙を伝わせて、ジュリアは応えた。

ジュリアの背後から後光のように以降の魔力が溢れ、それが雷雲を生み出し雷光の結界がジュリアを包んだ。

後光と雷雨の陰に彩られた闇の空間はまるで聖歌の一節を想わせるそう、彼女の魔法名は魔女の賛美歌…

「どんな理屈を並べても、どんな摂理があつたとしても

ジュリアグラディ

私とお前は違うものだ…

そんなお前が…お前なんか下院様の悪口を言うなんて赦さない！

！！！！」

ジュリアの叫びと共に、雷光の結界が爆ぜて闇に包まれた世界を威光が包んだ。

>i6893—518<

Out—side—

「ああああああああああ！！！！！！！！！！」

暴走する二人分の魔力によって肥大化した羽外套や威光の武装に包まれたジュリア「グラディは

咆哮ともとれる悲鳴を結界内に響かせる。

「ジュリアちゃん…！！」

「駄目…ジュリアって子もエノクも二人とも完全に意識を失ってる！！」

暴走する二人分もの魔力の強さに、元から操ってた魔術師もコントロールできてないんだ！！」

エリヤの言う通り、ジュリアの全身は…まるで魔術師の呪縛が視覚化したかのように侵食し広がる武装によって包まれ、それそのものが異形と化していた。

「でも…これは、神賀戸くんや下院さんがくれたチャンスだから！」

マルコは暴走するジュリア「グラディ」の巨体に引かず…ただ真っ直ぐにジュリアを縛る魔術師の呪縛を見据え
エリヤの黄金剣とドラウプニルの環を構えた。

「だから…助けるよ、ジュリアちゃんを！！」

ジュリア「グラディ」の口から、幽かに少女の声が漏れる。

「助け……来てくれたんだ…ジュリアを…」

I n | s i d e |

「はあああああああつ！！！！」

ジュリアは威光を束ねた光の大鎌でグラディに切り掛かる

しかしその攻撃は先程のように何度も通るわけではなかった。

威光に雷光を纏わせてもグラディは剣を宙空に浮かせそれをいなし

ている。

先程のように放電する程の魔力はもうジュリアは持っていないかった。あくまでジュリアの軀の主導権はグラディが占めてしまっているのである。「くっ…ていつ、このお!!」

ジュリアの猛攻に飽きたと言わんばかりにグラディは大剣を闇から成して

ジュリアを鎌ごと弾き飛ばした。

「クヒヒヒッ、やはりお前には何も成し得ない
生れつきの肉人形が意気がるからこうなるんだよお!!」

グラディの言葉には、もはやプライドも、矜持も、理性も無かった。ただ便利な道具に噛み付かれて怒り狂う子供じみた感情の闇
グラディはまさにその塊だった。

「くっ…私は、ジュリアは…人形じゃない!!」

ジュリアは起用に闇の壁に足をつき、再び雷光のような早さでグラディに接戦し、腕に雷雲を纏わせてグラディに放つ。

「「ブラッディサンダー、バジュラ!!」」

しかし、グラディの纏う雷雲の方がジュリアの雷雲よりも強力だった。

「きゃあああああっ!!?」

雷撃を受けてふらつくジュリアを、グラディは力任せに押さえ込んだ。

「何が違う！！！！教団に飼われ、騎士団に拾われ名前を書かれて便利な道具として使われる！！！！！！
ならお前はペットか！！家畜か！！！！！！」

「違う、違うっ！！！！ジュリアは…ジュリアは……」

次第に借り染めの意味も効果を失っていつているのだろう、ジュリアの瞳から徐々に光が失われていく。

グラディは勝利を確信して獣の笑みをジュリアに寄せた。

「眠れ、人形は人形らしく何も喋るな考えるな。」

「く…う………」

『眠っちゃ駄目ええええええ！！！！！！！！』

強い声と共に、闇の世界が晴れた。

O u t | s i d e |

「はああああっ！！！！！！！！」

「ああああAあああA A A A AああああA A Aああああ！！！！！！！！」

マルコとジュリアの剣が交差する。

二人の魔法使いは正八角形の結界の中を衝突しあう独楽のように剣劇を重ねては離れ、再び高速でぶつかり合う。

「ああああ！！！！！！」

ジュリア「グラディの腕に雷雲と避雷針が顕現し、マルコに向けられる。

「……………っ！！！！ドラウプニル、異界送り！！！！」

マルコは即座にジュリア「グラディの腕…雷撃の発生位置に向けてドラウプニルの環を放つ。

バチイイイイッ！！！！と、雷光はマルコを貫こうとするが、環を通った瞬間にそれをもんとするように異相の魔力へと変換されていった。

マルコの持つ精一杯の対魔法使いの防衛手段、しかし環を異相世界に直結させ…一度現象として顕現した魔法を再び魔力に戻すなど例えすべての物質の流れを制御する王国の魔法使いマルクトであっても絶望的な集中力を要する筈である。それに加え…

「ねむ……………れ、人形は…人形らしく……………」

ジュリア「グラディから、グラディと思しき男性の声が聞こえるとマルコは精一杯ジュリアの心に呼びかけてしまう。

「眠っちゃダメええええええ！！！！！！！！」

しかしその隙を読んだとも言うのか、叫んだマルコの方にジュリア「グラディの雷撃が防御を抜けて命中する。

「くうっ…熱…っ」

『ちょ、ちよっと!!何してんのマルコ!!!集中を切らしたら折角の新技术も使えないよ!!!?』

マルコは叫んだ、戦いながら叫んだ。

魔法への集中が切れて雷撃が肩を焼くが、マルコはそれでも叫ぶのをやめなかった。

「ジュリアちゃんは人形じゃない!!」

私はジュリアちゃんを知らないけど…それでも誰かを想う心があるのは知ってる!!!

だから負けないで、ジュリアちゃん!!!!!!」「やめるこの小娘がああああああ!!!」

マルコは叫び、新たな環を生み出してジュリア「グラディ」の放った雷撃を打ち消した。

魔法は、大魔力からの恩恵をこの世に呼び出す力。

ならばあらゆる『流れ』に精通した王国マルクトの魔法なら、ジュリアの威ケ光魔法も再び大魔力に還元できる筈。

それは先に成功した。

次にマルコが試したのは…

I n | s i d e |

「まさか…私の魔法を大魔力に還元して、更にジュリアに与えるだ
と!!!?」

嘘だ!!!!!!そんな事はただの机上の空論に過ぎない!!!!!!」

目の前で起こる超超常を前にして、グラディは後じさる。

「人間の想像し得る事は統べて、起こり得る物理事象である…
貴方の限界をあの子は越えた、それだけよね」

と、グラディの後ろにはいつの間にか明が立ち塞がり
気付いたグラディは突然に背中を押された子鼠のように明から離れる。

「……！！！！ヒイツツ！！？な、何者だ貴様！！何故、私とジュリアだけの空間に居るんだ！！！！」

「そんなの些細な事じゃない、ね？」

と、明は怯えるグラディをその笑顔に限りなく近い細い目で睨みつける。

その目に、グラディは見覚えがあった…憎い憎い、憎くて堪らない…自分の立場を奪ったあの若造に…。

……………プツン

「……………くっ」

グラディはその瞳に睨まれた瞬間に、何か理性の根底を否定されたかのように
ガクンと俯き…

「くっ！！くっくっく、ききかくききひひひぎひやはははは
あははははははは！！！！！！！！！！」

壊れた人形のように天を仰いで高笑いを放つ。

「ハア―
…ハア―
…」

「ぐ…グライダー…？」

「あらあら、こんな事で壊れちゃうなんてねえ……？」

やがて高笑いをやめて息を切らせるグラディその様子に困惑したジュリアをメイは手で制止させる。

「ほう……此処に来て、この場でその余裕……消えて無くなりたいと見える

「どこのだれかは知らんが、たかが小娘一人の為に……偽善者というものも考えものだなア……」

冷静な口調、しかしグラディの目は怒りに血走り…その心に理性は感じられない。

グラディはその全身から闇を噴き出して、目の前の二人と……その先にいるマルコを理性なき目で見開き睨みつける

「なら…」

その瞬間

「望み通り此処で消えて無くなつちマエエエエエエエエエエエ
エエエ!!!!!!!!!!!!」

闇が、暴発した。

Out | side |

『な、なにあれ！！？』

エリヤは目の前で繰り広げられる光景に驚愕する、ジュリア「グラ
ディが威光と闇に包まれた両腕を上げると
上空を闇（00）と威光の魔力が包み、公園どころか周囲を包むほ
どの太極図が形成された。

「「あ、あ、あ、あああああああつ！！！！！！」」

ジュリア「グラディが腕を振り下ろすと、太極図から何か一つの巨
大な物体が生成され落ちてくる。

その広さは結界を丸々包み込み、巨大な鉄槌のようにガラス細工の
ような結界を破壊しながらその全貌を見せてくる。

形は直方体、縦に長く、材質はおそらくコンクリートに近いもの。
窓も入り口も屋上もないが、それは…巨大な高層ビルとしか言いよ
うがなかった。

ジュリア「グラディは、その強大な魔力で高層ビルを丸々一個作り
出して振り下ろす心算なのだ。

あまりに非常識かつ、力任せな方法にエリヤはただの剣であるよう
に絶句し、すぐに叫んだ。

『じよ、「冗談じゃないわよ！！！！あんなもの落とされたら結界どこ
ろかこの街もただじゃ済まないじゃない！！！！』

エリヤの叫びも虚しく振り下ろされたコンクリートの大槌はゆっく
りと街目がけて飛来している。

「なんて馬鹿な事を、このままだと貴方もジュリアちゃんごと押し潰されちゃうんじゃないかしらね？」

このような状態で尚あきれ返るように問う明に、グラディは外套を翻しながら答える。

「嘗めるなあ見知らん魔法使いい？」

私は無限（〇〇）魔法によつて滅ぶことは無い、それにこの身は写し身だからなあ

本体も多少は『死』というダメージを受けるが…背に腹は代えられないなあ

まさか魔法使い一つ手に入れる事にここまでリスクを伴うとは、今後の教訓にさせてもらおうかああ……!!」

ジュリアの威光が世界に満ちてグラディは尚闇を溢れさせて力を拮抗させている。

「だから、安心してくだばれ敗者共おおつ!!!!!!!!!!!!!!」

しかしこの体の所有権を持つグラディの魔力にはまだ余裕がある。グラディは闇から蛮刀を抜き出してジュリアへ駆け出した。

「く…」 「あらあら、諦めちゃ駄目よジュリアちゃん…ね♪」

二人の力比べに参加するでもなく、明はち、ち、ちと指を振ってジュリアに言う。

「何で、こんな時に…っ？」

「私は、外にいる人たちの事を全員よく知ってるからよ
ここに來て私がやることはもう何も無い、ただ全部見守るだけ…ね
♪」

明が指差したその先には、再び浮かんだ立体映像が外の・・・ある
人物を移していた。

「あ……………」

降り注ぐ絶望が、そこにあった。
魔法を掲げ、自分を助けようとしてくれている少女の姿がそこにあ
った。

手の中にあるものが、鼓動した。

公園へと走る、愛すべき婚約者がそこに居た。

『私の名を詠んでくれ、ジュリア＝フリードリヒ＝ヘンデル…さす
れば私は、汝の望むすべてを与え
そして汝の剣となるっ…』

頭の中で、声が聞こえたそのとき…ジュリアは魔力を拮抗させてい
たその手で、何かを握る。

「そうだ、ここでジュリアは…負けてられないよね…！來て、メタ
トロン…！」

ジュリアの手に、切っ先の無い銀の剣…メタトロンが握られる。

「ジュリアを信じてるエノクの為にも、ジュリアの愛する下院様の為にも…」

Outside

マルコもまた降り注ぐ絶望を前に見据え、腕輪のついた右手をジュリア「グラディ」へ…その先のコンクリートの鉄槌へ向ける。

そして、すう…と、息を吸い

「外に出たがつてるジュリアちゃんの為にも、貴女を愛してる下院さんのためにも…」

ガチャガチャ…と、金属がこすれあう音を出しながらドラウプニルの環は移し身を増やし

マルコの腕を包み砲身のように長く細くなりながら二つの標的にその照準を合わせる。

> i 1 1 2 5 2 — 5 1 8 <

ぎやりい い い い イッ…!…!と、ジュリアの剣がグラディの蛮刀を受け止め

カ…ッ…!…!…!…!と、マルコの砲身から光が放たれたのは同時。

「私は負けない、いや…!…」

ヒュカツ！！と、ジュリアの剣がグラディの両腕を切り離れたのとバキン！！！と、放たれた環が膨張しジュリア「グラディをすり抜けて降り注ぐ絶望を迎えるように構えたのは

同時。

「負けれない！！！！！！！！！」

二人の叫びと共に、奇跡が起きたのも

同時。

Outside

「つ ああああああああああ……！！！！！！！！」

マルコは襲い来る魔力の衝撃に耐え、その身を強張らせる。

大規模な環は高層ビルを迎え入れると黄金の光を放ち、その抗生物質を溶かすように分解し始めた。

「まさか……新技で早速こんなもの消すハメに、なるなんて……」

エリヤもその身の魔力を環に与えてマルコの演算補佐をする。物質の構成を理解し、分解する。

それにかかる莫大な魔力と、絶望的なまでの消費精神力

しかしエリヤは曲がりなりにも人知を超えた存在、天使である。

朝飯前とは言わずとも、その身には人知を超えた演算能力と魔力を持っているのである。

そして分解された物質は魔力の塊となってふわりと漂い、環を通ってジュリア「グラディに吸収されていく。

『奇跡の世界…っ！！！！』

「メガロマニア…ドレイン！！！！！！」

マルコが魔法の名を冠し、残った全力の魔力を環に込めると絶望の鉄槌は一気に環を通り、何者にぶつかるとも何者を押しつぶすでもなく二人を威光の魔力で包んだ。

I n s i d e

「う、うでがっ！！！！私の腕があああああああっ！！！！！！」

グラディはじたばたとその場にもがき苦しむ。

グラディには『滅び』が存在しない…しかし、それなら何故移し身をジュリアに取り憑かせたのか。

それは、グラディが不死ではないという決定的な証拠だろう。

これまでの周到な自己保身もわが身かわいさによるものだ。

つまりグラディは移し身であろうとも己が身を傷つけられれば痛いし、それを忌避しようとする事になんら不思議は無かったのだ。

その時、グラディの闇に大きな揺らぎが生じ…同時にジュリアの背後から威光の光が溢れた。

「あ、あ、あ、あああああああつ」

それを見たグラディは、絶望をその目に浮かべて言葉にもならない声を上げる。

「魔術師、グラディ!!マクマートリー」

ジュリアはその威光の光を、剣にメタロンまわせてグラディに告げる、叫んだ。

「ジュリアから、出てけええつ!!!!!!!!!!!!!!」

「ぎゃああアアアアああああああああああああああああああ!!!!!!」

濁流する川のように、膨大な威光の剣筋がグラディを飲み込み
グラディは断末魔をあげながらその威光の流れる先へと飲み込まれていった。

やがて…あふれ出す威光が止んで、ジュリアの世界から闇が消失したとき…

「やったよ……かいん、さま…エノク……王国の、女の子………
……」

ジュリアは、意識を手放して安寧とした眠りの底へと落ちていった…。

O u t | s i d e |

「んん…んっ、あれ…ジュリアちゃんは!？」

威光の光が止み、あまりのまぶしさに目をつぶっていたマルコは周囲を確認しようと辺りを見回した。

『マルコ、あそこ!！』

エリヤがグイツとマルコの手を引き剣を向けると、その先には気を失い眠るジュリアの姿があった。

魔力に任せて膨張した外装はぼろぼろと崩れ落ちて世界に還元されており、その浮力によって浮かんでいたジュリアは最後の闇の鎧が崩れると同時に浮力を失って落ちていく。

「ジュリアちゃん!！」

マルコはジュリアを追って受け止めようとするが、間に合わない。公園の外から、ジュリア目掛けて走ってくる人影を見つけたマルコは…

「…風よ!！」

ジュリアの下に環を出現させ、ジュリアを上昇気流で押し上げ落下の勢いを殺した。

「ジュリ!！…っと!！!！」

下院は地に足を踏みつけてジュリアを両手で受け止めた。そして力いっぱいジュリアを抱きしめて、俯く。

「よかった……無事で…っ」

それを見たエリヤはハアアと、安心感を吐き出すようなため息をつく。

「よかった、助けることができて…」

マルコはマルコで、二人を助けることができた事に満足そうな笑みを浮かべた。

下院はそんなマルコを見上げて言う。

「ありがとう、^{マルクト}王国の魔法使い」

下院にマルコは困ったような顔をして、自分の名前を告げた。

「マルコ、晶水マルコだよ」

D a a t h : 終幕、少女と…

さてさて、皆様いかがでしたでしょうか

魔法少女達の想いに魔術師たちの思惑が交錯するこの物語。

至らぬところも多く、賢明なる読者の皆様にさえよく解らぬような『説明不足』と言える所がまだまだ多いことでしょう。

結局この案件の黒幕であるところのグラディ＝マクマートリーは写し身を倒した処で『いまだ健在』でしょうし

彼の後ろにもまだまだ彼の言う『お姫様？』神の入口？ 騎士？』

犬？』等幾人かの思惑があるところを見ると

『ブランクに関わる事件もまだ終わってなどいません』、ね。

そもそも『私と下院の関係』は？私は下院に対して何を『赦していない』のでしょうか？

そもそもこの街が私の『楽園』とは、一体いかなることなのでしょう？

…はい、白々しい？当然です、この物語の『語り手はあくまで私』なのですから、ね？

ただ、いつかは『語り手を降りる時も来る』でしょう、ね。

此度はそれぞれのエピソードを終える事で、一期の絞めとさせていただきますでしょうか、ね。

ジュリアちゃんを巡る戦いから3日後、ブランクが街から発生しな

くなる事はなかった。

聞いた話によると、ジュリアちゃんにとり憑いていた魔術師―魔法使いでもあったらしい―はあくまで分身みたいなもので、本体は未だどこかに潜んでいるそうだ。

それから私は、魔法少女を続けながら普通の小学三年生として生活してる…蓮君も。

でも、ジュリアちゃんは…

「ジュリアちゃん、あれからどうなったかなあ…？」

そう呟いた私に、後ろから誰かが私の顔を覗きこんで言う。

「外国の子？」「うひゃあ！！美香あびつくりさせないですよ」

「にひひ〜ごめんねい」

と、美香は笑ってはなれる。

でも、私は美香の問いに答えたくて…所々はしよって話すことにした。

「…友達になりたかったんだけど、悪い事しちゃって話す前に何処かにいつちゃった」

「うむう、それは中々にヘヴィな話だねい」

美香が顎に手を当てて考える。

「でも、会った事はあったんだ…どんな子かも知ってて、彼女を助ける手伝いもしたの」

「…それでマルコが会いたいつて願うなら、きっと会えると思うよ」
え…と振り返ると、美香はいつもの明るい笑顔で言う。

「私もマルコに割と助けてもらってるもの、実行委員を作れたのもマルコの機転のおかげだし
私の髪こんなだから、マルコがいなかったら学校でも一人だったと思うんだ

昔は寂しくって人形でも作ろうかって思ってたしねい」

美香は恥かしそうに指でその綺麗な金髪をくるくるしながら言う。

「でも、助けてくれた恩があるから…じゃないんだ
助けあう事が楽しいから、マルコと一緒にいるんだよ私も
だから、きっとそのジュリアって子も来るよ…友達になりにねい」

美香がそう言う…にゃあ、と黒猫が私たちの隣の塀を通り過ぎて行った。

美香は私の手を繋いで、ぎゅうと握る。

「その時は、その子も実行委員メンバーにしようねい」

「……………うんっ」

私は笑顔で美香に応えた…応えたんだけど……………

「ええ、突然ですが急遽こちらに転校してきた新しいお友達を紹介します」

「ジュリア＝ヘンデルですつ、よろしくねっ！」

教卓のすぐ隣で、白く光る銀髪に黒い制服姿のジュリアちゃんが元気に挨拶をする。

私は突然の転校生に驚きを隠すことなく呆然としていた。

え~~~~~と…

操られていたとはいえ彼女は色々問題起こしたから暫くの間は一薔薇十字騎士団^{うち}日本支部で預かることになったんだって。

団長から『元気すぎるくらいの子だけど、ジュリをどうかよろしく』だってさ

(- - ;) B y 蓮

教室の端を見ると、神賀戸君は眉間を手で押さえてため息をついていた。
でも…

「何してんのマルコ、早く紐引っ張って！」

「ふえ？え…これ？」

と、美香が横から小声で言って来たから引っ張って見たら。

パン！

というクラッカーの音とともに

『ウエルカムトウ青銅欄第三小学校!!』『ようこそウエルカムジュリアちゃん!』

『いらつしゃいませ実行委員!!』

と書かれた張り紙が、前よりも進化した装いで教室の壁に垂れ下がった。

「何時の間にしかけたんだろう…」

「おれがー、昨日の夜のうちにー、忍び込んでー…」

下を見ると、太一君が疲労で地面に突っ伏していたことによようやく気がついた。

「ああ、太一君…おつかれさま」

「につひつひー、この金奈美香の情報網を甘く見たらいかんよー? ジュリアちゃんって名前なのはさっき聞いたんだけどねい」

美香はジュリアちゃんに向かい大きくサムズアップする。

「あつ……」「あ……」

その時、こつちを向いたジュリアちゃんと私の目が会い…緊張で胸が高鳴った。

「あつ…あの……」

と、私がどきまぎしている間に…ジュリアちゃんは笑顔を向けて

「これからよろしくね、マルコ」

と、元気な笑顔で言ってくれた。

何でだろうか、その時に心配だの何だのは全部すっかり消えていて

「……うんっ、よろしく…ジュリアちゃん!!」

私は、新しく白い魔術師の友達を迎えた。

白と黒の魔術師は、私の生活を急激に変えちゃったけれど…二人とも、今は大事な仲間です。

王国の魔法使いと、白と黒の魔術師を巡る物語…
ひとまずは、ここでおしまい。

どこまでも続く、星のちりばめられた宇宙の闇

その闇と蒼い月のような光が、その空間を支配していた。

そこは、灰色の砂漠が広がっていた。

誰もいない…否、黒いコートを着た同じく黒い長髪の女性があるい

てきている…明だ。

そこは、月と呼ばれていた。

何故、どうやって明が月に居るのかは解らない。

しかし彼女に不可能はない、何故なら彼女も魔法使いだからだ。

総てを否定する、反の魔法使い…明・綾乃。

彼女は月の裏側まで歩いていき、やがて一つの物体を目にして近づいていく…

明がそれに近づいたその時、ようやくその正体は掴める…本だ。

暗い月の裏側で、明が近づいていくと…いつの間にかその本をまた別の女性が大事に抱えている事が確認できた。

流れるような銀髪に、悲しみに濡れたような紅い瞳…彼女を包む霧囲気は、人間のそれを大きく外れていた。

余りに彼女を包む悲しみの密度が違うのである。

「や、久しぶりねえ♪こんな何もないところだけど、異分子のせいでずっと放置していたわね…
最近どう？」

受け渡された本を読みながら、明は女性に問う。

「ずっと見ていたよ、退屈はしなかった。しかしその内に3246回仔が生れ、その内総てを殺した
暴走が起きなくて良かった…」

「御免なさいねえ…」

明は申し訳なさそうに目を閉じてパタンと本を閉じる。

「んっ…いいさ、これでまた暫くは暴走の危険もないだろう？それに、仔を殺すことにはもう慣れた」

そう言つて女性は煙草を咥え、ライターで火をつける。
真空である宇宙ではそもそも火もつかない筈なのだが、そのような摂理など二人には無意味なのである。

「それにしても、随分とサービスが良い
本当は、ジュリアという子のサポートなんてしない心算だったでしょう？」

「ん、必要なのはマルコちゃんだけだったからね
でも…まあ氣まぐれよ」

明もまた歩き出して言う。

「必要なのはより強いマルコの力…その為にグラディにはもっとも
つと悪役になつてもらわないと困るものねえ？
彼の内側を探つて見たら、まだ他にイレギュラーはあつたみたいだしね？」

明が生き活きと言うと、女性は煙草を吹いてそれに返し問う。

「ハア……マルコの更なる成長か、それも賭けでは？」

「そう…ね」

明は地面に闇色の魔法陣を発生させて、その上に乗る。

「完全な確率と結果だけを求めるなら、神はだた一編の物語を書け

ば良い

もしあの子が…私達の真相に気がついてしまったならば、その時は……」

明は、振り返って女性と悲しい瞳同士を向け会った。

「その時は、私とあの子の戦いが待っている…それだけよ」

明が魔法陣と共に消えた月の上の世界は、何処までも静かでそれでも何処か神秘的な魔力に包まれていた。

女性は宇宙の闇に向かい、その両腕を広げて願う

「ああ、願おう…その時が来ない事を

その時は、私は貴女の最悪の武器となる

願わくば、苦しみのない終焉を

私達の望みは、ただそれだけなのだから…」

女性はそう言くと、悲しい瞳の目を閉じて

弱い重力の宇宙空間に輝く涙の滴を浮かばせた。

次回予告

何処かで誰かが嘆いて呟いた

「ああ・・・この世界にきせきなんて・・・・・・・・・・・ない」

Next: Magical Girl Malchut Mal
ko

ジュリア「ヘンデルをメンバーに迎え、マルコは日常と非日常の両方に新しい友達ができた。

蓮の魔力も回復し、魔術と魔法のかかわる日常もようやく落ち着きを取り戻してきた。

…しかし、それはこれから続く長い闘いへの序章に過ぎない。
新たな脅威が彼女達の前に現れるとき、マルコは…

「ブランクが…こんなに沢山…っ!!?」

「^{アイン・ソフ}グラディからの話は聞いている。某は^{アイン}魔術師にして無の魔法使い、^{マルクト}エリアス・レイヴィ
王国のマルコよ、速やかに消えてもらおう」

新たに表れるは見えざる武器を操る盲目の魔法使い…そして、増え続けるブランク。

男の凶刃がマルコに向けられるその時…

『論証破綻、魔術の実行を否定する』

「ぬう…!!」

「あらあら、消えるのはそちらではないのかしら…ね?」

あらゆる現象を否定する明の魔法、反が^{クリフト}ついに戦いの場で披露され、そして魔術師たちの目的もついに明かされる…

「我らが目指すのは神の摂理、言葉に言えぬ11番の魔法。グラデイは知らぬが、我々の目的はただ一つ…復讐だ
我が主を壊したこの世界を、神そのものさえも死滅させ、この世界を…終わらせることだ!!」

魔術師の瞳に映るのは、ただ愛した主の姿のみ…
そして現れる第三勢力

「慈悲の魔法使い…!?!」

「魔法が全然通じない!!?!」

「待つんだジュリアー!! そいつに攻撃を続けると……!!」

「俺らの親友にに手を出したあ、頭が高えええええええええええ！」

「よっし！！学園祭のテーマ、決まったぜい♪」

「えと……あのっ私と友達になって欲しいのっ!!」

守るべき『日常』の欠片も、少しずつ非日常へと取り込まれていく……

「これが私の存在理由だから……さようならなの……」

紅い少女の涙は、慈悲の魔法を発動し

「そんな勝手な都合の為に、どれだけの人間が苦しんだと思ってる……これは僕から貴様等への復讐だ……！」

「確かにジュリアは今寂しいかもしれない、でも……友達も、仲間も、世界も無くなっちゃうのは絶対に嫌だ……！」

だから、絶対に死なせるもんか、エトナアああ……！！！！！！」

「辛くったって、絶望したって、諦めたって、未来は続く…」

だからっ！！私はそれを助けたいんだ！！

どんなに未来を奪われても、また新しい未来を掴めるような奇跡を…掴んで見せる！！

だから…私は負けない、いや…負けられない！！」

常識の壊れた世界の中で尚、マルコは、ジュリアは、蓮は、日常を護るために戦い続ける

果たして、その先にある未来とは・・・

これは…悲劇から始まった物語

Magical Girl Malchut

Malko

王国の魔法使いと奪われた未来

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8541i/>

魔法少女マルクトマルコ～『王国の魔法使い』と『白と黒の魔術師』～

2011年11月15日17時32分発行